

新儒教 (1.1.1版)

1章 宗教	3
1節 儒教系統の宗教	3
2節 新儒教	6
3節 新儒教系統の目的	9
2章 世界観	14
1節 儒教系統の世界観	14
2節 世界の正しさと世界観	26
3章 動物と人間	30
1節 儒教系統の動物	30
2節 儒教系統の人間	33
4章 自己	41
1節 儒教系統の自己	41
5章 善悪	49
1節 儒教系統の善悪	49
6章 性	57
1節 儒教系統の性	57
2節 儒教系統の男性	61
7章 富と所有	65
1節 儒教系統の所有	65
2節 儒教系統の富	70
8章 法体系と契約	74
1節 儒教系統の法体系	74
2節 儒教系統の契約	78
9章 死生観	81
1節 儒教系統の死生観	81
10章 自己認識 (アイデンティティ)	86
1節 儒教系統の自己認識	86
2節 自己認識の形成に関する儒教系統の手法	89
3節 儒教系統の分類	92
4節 混血に関する儒教系統の分類	97
5節 アメリカ先住民について	102

1章 宗教

以下では、人間界の創造主は儒教系統の宗教を提示する。宗教や文明、人種や民族が異なると、宗教が何であるのかが異なるように見える。例えば、アブラハムの宗教における宗教観は仏教やヒンドゥー教における宗教観と異なるように見える。また、時代に応じて、宗教のあり方が異なっているように感じる。ここでは、彼は儒教における現代的な宗教観を提示する。

1節 儒教系統の宗教

【儒教系統の宗教】

彼は次を決める、または信仰する。

- (1) 宗教は系（システム）である、かつ宗教はx教系統の社会を形成する。
- (2) 宗教はx教系統の人間競技系である、かつその宗教は組式（プログラム）される。

言い換えると、宗教は人工的な世界それ自体である。または、宗教は管理系（OS）のような何かである。彼はシステムの日本語訳を系や家、世界系や競技系とする。宗教はサッカーやバスケットボールのような運動競技である。

実際、ユダヤ教はユダヤ教系統の社会を形成している。イスラム教はイスラム教系統の社会を形成している。ヒンドゥー教はヒンドゥー教系統の社会を形成している。儒教は儒教系統の社会を形成している。なお、その社会の管理及び統治を上記の社会形成に便宜的に含める。

【宗教の相続】

彼は次を決める。

- (1) 宗教は父から息子へと父系で相続される。
- (2) 儒教は儒教徒の父から儒教徒の息子へと父系で相続される。

または、宗教は父から息子へと父系で伝達される。なお、上記は儒教系統の宗教に関してである。言い換えると、儒教という人工的な世界は儒教徒の父から儒教徒の息子へと父系で相続される。

【宗教と統治】

彼は次を信仰する。

- (1) 宗教は競技系を統治する手段を授ける。

宗教は社会を形成する競技系である。また、宗教はその社会を統治する手段を授ける。歴史的には、ローマ帝国の崩壊の後に、ゲルマン民族の王族がキリスト教に改宗したのは、キリスト教徒

の民を統治する必要があったからである可能性がある。また、チンギスハンの子孫もイスラム教徒になったり、イスラム教を統治に関連づけて、彼らの民を統治した。宗教は社会形成だけでなく、統治にも密接に関係する。

【宗教と関係】

彼は次を認識する。彼はその次を信仰する。

- (1) 宗教は民族及び人種、社会及び国家及び文明に密接に関係する。
- (2) もしある主体が宗教を認識しないならば、その主体は民族及び人種、社会及び国家及び文明を正確に認識しない。

例えば、アブラハムの宗教は実質的にはコーカサス人種のための宗教である。西洋文明はキリスト教系統の文明である。アメリカ合衆国はキリスト教系統の国家である。インド人のアメリカ国民はヒンドゥー教系統の社会に所属している。もしある主体が宗教を認識していないならば、その主体はこれらも認識していない。

もしある主体が宗教を認識しないならば、LGBTや同性婚がキリスト教系統の性であることをうまく認識していない。その主体は意味もわからず白人の真似をして、キリスト教系統の性に何となく賛成する。

もしある主体が宗教を認識しないならば、日本国憲法がキリスト教系統の法体系であることをうまく認識していない。その時、たとえ大和民族がそのキリスト教系統の法体系で死刑にされなくても、彼らはその死刑が刑罰でなく単なる殺害行為であることを認識することができない。

【宗教の段階】

彼は次を便宜的に認識する。

- (1) 始め、サピエンスは動物と同じであった。
- (2) 次に、サピエンスは呪術や迷信を始めた。
- (3) さらに、人々は神話を創造した。
- (4) 最後に、人々は宗教を創造した。

歴史的には、無宗教、迷信や呪術、神話、宗教の順が存在する。迷信や呪術は精霊信仰に近い何かである。(3)における神話には、神道やギリシア神話が存在する。(4)における宗教には、ユダヤ教やキリスト教、仏教や儒教が存在する。(3)は民族信仰であり、(4)は宗教である。民族信仰は民族や世界認識や自己認識を民族に授けるが、社会を形成しない。宗教はより一般的で強力な社会を形成する。さらに、宗教は統治手段を授ける。

【宗教に関する思考規範】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある対象が宗教であるならば、その対象は次のxのいくつかを持つ。
- (2) もしある対象が宗教であるならば、その対象は善悪を持つ。

主要なxには、世界観や目的、人間性、善悪や自己、富の規範、性規範、刑罰、契約や法体系が存在する。その他のxには、認識や判断、力や意志、管理及び統治、人間観や労働観、国家観や歴史観が存在する。また、その他のxには、言語や文字や建築や創造主や神や正しさが存在するかもしれない。宗教に必ず必要なのは善悪である。また、宗教は管理や統治にも必要である。

例えば、認識には、西欧白人がアメリカ大陸で統治者を担っていることは植民地主義や奴隷主義の継続でないのかが存在する。判断には、現在のアメリカ大陸の状態は善であるのか、悪であるのかが存在する。日常的には、宗教は善悪の基準を信仰者に授ける。

性規範は性欲を自己管理、自己統治する。富の取り扱いはお金の貸し借りや利子、資本主義に関係する。死生観は葬式や墓、胃ろうや安楽死や尊厳死に関係する。契約や法は国家や商業、会社に密接に関係する。刑罰は死刑や裁判に関係する。人間観は家畜や殺人や中絶に関係する。労働観は奴隷や牧畜や農耕などの生活形態に密接に関係する。

【信仰する】

彼は信仰するを次のように決める。

- (1) 信仰するとは、ある行為である、かつある主体がある対象が実際的であると考ええる。
- (2) 信仰するとは、ある行為である、かつある主体がある対象が正しいと考える。

日常的には、ある対象は見えないものや物質世界には存在しないものである。代表的な対象には、創造主や善悪が存在する。例えば、男女平等が善である、または男女平等が正しいと考えるのは、信仰である。つまり、キリスト教徒は男女平等が善である、または男女平等が正しいことを信仰する。創造主の場合、ある種の教徒はもしある対象が存在するならば、その対象の創造者が存在する。その種の教徒がこの思考規範を正しいと考えるとき、その種の教徒は自然界や世界の創造主を信仰する。

【宗教と主義】

彼は次を信仰する。

- (1) 宗教は主義でない。

西欧白人は世界の全てを主義化しようとする。その結果として、彼らは宗教も主義化しようとする。例えば、ユダヤ教徒の西欧白人はユダヤ教主義者になっているように見える。キリスト教徒の西欧白人はキリスト教主義者になっているように見える。ユダヤ教やキリスト教もユダヤ主義やキリスト主義になっているように見える。確かに、信仰には、主義や主張の側面が存在するが、儒教では、宗教は主義でない。

【宗教に対する誤認識】

彼は次を認識する。

(1) 宗教は次のxでない。

xには、説明や救いや修行、縋りつく何かや助けてくれる何かや安心感を与えてくれる何かが存在する。宗教の役割は自己の社会形成である。宗教の役割は自然界の仕組みを説明することでない。自然界の仕組みを説明するのは分析者の役割である。

【宗教の衰退に関する思考規範】

彼は次を信仰する。

(1) もしある宗教が社会形成能力を失うならば、その宗教は衰退する。

例えば、日本国における仏教は自己の強力な社会を形成する能力を失ってきたので、仏教は衰退してきた。実際、仏教は西欧文明よりも強力な社会を形成できてこなかった。。さらに、世界の説明は近代科学や近代数学によって取って代わられた。その結果として、仏教は衰退した。仏教は社会を形成する手段を与えることができなくなった。さらに、たとえ仏教が世界を説明するとしても、その説明は科学や数学に著しく劣り、仏教それ自体が単なる知識やウンチクになった。真面目な仏教では、修行や悟りが残っている。しかし、たとえ仏教徒が修行をして、悟りを開いても、彼らは西欧文明よりも強力な自己の人間社会を形成することができないだろう。

2節 新儒教

【文】

彼は新儒教における文及び文章を次のように決める。

(1) 番号を持つ文は実際に機能する文である。

(2) 番号を持つ文の下に存在する文、または文章は番号を持つ文の補足や説明である。

彼は (1) の文を原因文と便宜的に呼ぶ。彼は (2) の文を必要文と便宜的に呼ぶ。

【呼称】

彼はこの宗教を次のように呼ぶ。

(1) 彼はこの宗教を新儒教と呼ぶ。

(2) 彼は新儒教の信仰者を新儒教徒と呼ぶ。

彼は新儒教の略称を儒教と呼ぶ。彼は新儒教徒の略称を儒教徒と呼ぶ。

【新儒教と文明】

彼は新儒教を次のように認識する。

- (1) 新儒教は文明宗教である。
- (2) 新儒教は東洋文明に所属する。

または、彼は次を提示する。もしある対象が新儒教であるならば、その対象は東洋文明に所属する。

【新儒教と民族宗教】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が新儒教であるならば、その主体は民族宗教と新儒教の組みを信仰する。
- (2) もしある主体が東洋文明に所属するならば、その主体は民族宗教と文明宗教の組みを信仰する。

例えば、ある主体は神道と新儒教の組みを信仰する。別の主体は神道と仏教を信仰する。民族宗教には、広義には、モンゴロイド人種の民族宗教が存在する。狭義には、東洋人の民族宗教が存在する。文明宗教には、儒教と仏教が存在する。なお、ここでの文明は東洋文明である。

【新儒教徒と文明的な所属】

彼は次の思考規範を信仰する。

- (1) もしある主体が新儒教徒であるならば、その主体は東洋文明に所属する。

対偶をとると、もしある主体が東洋文明に所属しないならば、その主体は主体が新儒教徒でない。上記の使い方はなりすましの防止である。

【新儒教徒の原動力】

彼は次を信仰する。

- (4) 新儒教の動力は新儒教徒の目的力である。
- (5) 新儒教の動力源は新儒教徒の目的意志である。

目的力と目的意志は後述である。物体を運動させるためには、エネルギーや力が必要であるように、社会形成のためには、構成要員の意志や人為的な力が必要である。

【新儒教における語族】

彼は新儒教における語族を次のように認識する、またはそう決定する。

- (1) 新儒教の言語は日琉語族及びシナチベット語族と朝鮮語族とアルタイ語族（諸語）とウラル語族の一部である。
- (2) 新儒教の語族は上記（1）の子孫や派生である。
- (3) 新儒教の語族はモンゴロイド人種の語族、特に新モンゴロイド人種の語族である。

いわゆる、新儒教の言語は東洋人の言語である。広義には、新儒教の言語はモンゴロイド人種の言語である。狭義には、新儒教の言語は東洋人の言語である。

【新儒教の人種】

彼は新儒教における人種を次のように決定する。

- (1) 新儒教における中心的な人種はモンゴロイド人種、特に新モンゴロイド人種である。
- (2) 新儒教の中心的な地域はモンゴロイド人種の自然な生息地、特に東洋地域である。

モンゴロイド人種の自然な生息地には、東洋地域と東南アジア地域、そしてアメリカ大陸が存在する。

【新儒教と相続】

彼は次を信仰する。

- (1) 新儒教は父系で父から息子へと相続される。

言い換えると、新儒教という人工的な世界は父系で父から息子へと相続される。または、新儒教という競技系（システム）は父系で父から息子へと相続される。

【設計者】

彼は新儒教の設計者を次のように決定する。

- (1) 新儒教の設計者は人間界の創造者（設計者）である。
- (2) 新儒教の設計者は新儒教の統治者でない。
- (3) 新儒教の設計者は新儒教の統治者及び競技者によって保護される。

場合により、彼は設計者を創造者や創造主と呼ぶ。

【修正】

彼は新儒教を次のように認識する。

- (1) この新儒教は否定されない。
- (2) この新儒教は新儒教徒によって連続的に修正・拡張・更新される。
- (3) この新儒教は新儒教徒によって連続的に整理整頓、理論化、一般化される。

彼は修正を次のように認識する。

- (4) もし新儒教徒が彼の認識1を修正するならば、その教徒は関数（認識1）のように修正する。
- (5) もしある新儒教徒が新儒教を修正するならば、その新儒教徒は人間界の創造主よりも優秀である。

新儒教は世界に対する彼の認識を連続的に変化させる。

3節 新儒教系統の目的

【x教系統の目的】

彼は目的を次のように決める。

- (1) 目的はある主体が実現するつもりであるある対象の存在や状態や運動である。
- (2) x教系統の目的はx教徒が信仰する目的である。
- (3) 新儒教系統の目的は新儒教徒が信仰する目的である。

場合により、彼は対象を現象と置き換える。

【新儒教の現実的な目的】

彼は新儒教の現実的な目的を次のように信仰する、またはそう決める。

- (1) モンゴロイド人種、特に東洋小人種がx文明、特に西欧文明と文明的に、かつ宗教的に対峙する。
- (2) モンゴロイド人種、特に東洋小人種が自己の文明「東洋文明」を形成する。

西洋文明、特に西欧文明は近代以降の世界を支配した。現在、その西欧文明は衰退している、または没落している。そして、プーチンを代表とするロシアや習近平を代表とする中国を含む非西欧は西欧文明の強制を嫌っているように見える。

しかし、たとえ彼らが西欧を嫌うとしても、もし彼らが西欧文明よりも優れた文明や制度を形成することができないならば、彼らは西欧文明と対峙することができないだろう。結局、彼らが西

欧に押し切られる可能性は残り続ける。これはたとえ西欧白人が彼らの父なる神を殺したキリスト教を嫌うとしても、もし彼らがキリスト教よりも優れた宗教を創造することができないならば、彼らはキリスト教の呪縛から逃れることができないことに似ている。

彼らは自由主義や民主制、国民国家や法体系、人権に代わる新たな何かを提示する必要がある。そこで、人間界の創造主は西欧文明に対峙することができるような文明を形成することを目的とする。つまり、彼は自由主義や民主制、国民国家や法体系、人権に代わる何かを創造する、または設計する。

【アメリカ大陸の奪還と白人帝国主義の終了】

彼は儒教系統の目的を次のように決める。

(1) モンゴロイド人種らがアメリカ大陸をアメリカ先住民とモンゴロイド人種のために奪還する。

(2) モンゴロイド人種らがオセアニアやアメリカ大陸における白人帝国主義と植民地主義と奴隷地主義と不可触民地主義を終了させる。

西地中海人及び西欧白人による植民地主義は大航海時代から始まり、第二次世界大戦の後の植民地の独立で終わったと感じられてきた。しかし、アメリカ大陸やオセアニアはいまだに白人帝国主義と植民地主義と奴隷地主義と不可触民地主義が継続している。

実際、西欧白人が統治者を担い、資源を所有して、爆弾を世界へと落下させている。アメリカ大陸やオセアニアの現状は戦前のインドやサブサハラ、東南アジアと同じである。モンゴロイド人種はこの種の状態を終了させて、アメリカ大陸をモンゴロイド人種のために奪還する。

当然、たとえモンゴロイド人種がアメリカ大陸を現在の状態で奪還しようとするとしても、彼らはその奪還を実現することができないだろう。なぜなら、彼らは主権や国民国家、自由主義や民主制に代わる新たな競技系（制度）を設計することができない。そこで、人間界の創造主は奪還のための国家系や価値観や善悪、新たな統治制を含むその他の制度を創造する。

【モンゴロイド人種の虐殺の予防】

彼は儒教系統の目的を次のように決める。

(1) 新儒教徒がモンゴロイド人種及びその遺伝的に分岐された子孫の近世以降における虐殺や絶滅の再発を防止する。

(2) 新儒教徒がモンゴロイド人種及びその遺伝的に分岐された子孫の奴隷化や植民地化の再発を防止する。

例えば、アメリカ大陸の多様性はモンゴロイド人種の虐殺と絶滅の結果である。にも関わらず、その多様性が素晴らしいことのように賛美されている。さらに、アメリカ国民はその多様性を世界へと強制しようとしている。この行為はナチスの賛美や黒人奴隷に賛美に等しい。けれども、モ

ンゴロイド人種は西欧白人のこの行為を傍観している。

酷い場合、彼らはその多様性を賛美して、アメリカ大陸の多様性は素晴らしいとモンゴロイド人種の子供達に教育しようとしている。これはホロコーストの生還者の子供にホロコーストは素晴らしいと強制的に賛美させるような行為である。これは黒人奴隷であった子供に黒人奴隷は素晴らしいと強制的に賛美させるような行為である。

この状態では、多様性が西欧白人の流入を再度実現させて、彼らがアジアにおけるモンゴロイド人種をアメリカ先住民のように虐殺、絶滅させる可能性が上昇する。そこで、人間界の創造主はその虐殺及び絶滅、その奴隷化及び植民地化を防止する。なお、新儒教徒は新儒教徒らでも良い。

【礼節ある世界の形成】

彼は儒教系統の目的を次のように信仰する。

- (1) 新儒教徒は礼に沿った世界を形成する。

なお、人間界の創造主がその世界を人工的に創造した（設計した）。彼が礼に沿った世界を設計して、新儒教徒がその設計に基づいて、礼節ある世界を実現する、またはそれを形成する。

【生存】

彼は儒教系統の目的を次のように信仰する。

- (1) 新儒教徒が遺伝的に分岐された種としても宗教的にも文明的にも永遠に生き残り続ける。

この新儒教の目的は生存である。または、この新儒教の目的は生存の維持である。

【発展】

彼は儒教系統の目的を次のように信仰する。

- (1) 新儒教徒がより善な方向に人間離れした系を形成する。
- (2) 新儒教徒がより善な系を形成する。

より善な方向は（既存の存在から）より高次の方向に置き換えられるかもしれない。または、より善な方向はより高次的に進化したのであるかもしれない。より善な方向は物質から意識、主体（中の人）、そして未知の高次の何かの方向である。より善な系はより正しい系である。

【永続的な競技系の形成】

彼は儒教系統の目的を次のように信仰する。

(1) 新儒教徒が宇宙を含む世界のどこでも空間的にも時間的にも永続的に機能する競技系を形成する。

上記の競技系は新儒教である。例えば、儒教徒が新儒教を火星に持って行って、その競技系を地球と火星において機能させる。中国やロシアのような統治系はその権力を火星にまで及ぼせないで、火星と地球の両方で機能する統治系でない。アメリカ合衆国も彼らの軍事力を地球から火星まで一回一回展開させることができない。新儒教徒が地球と火星における民を同時に統治することができるような競技系を形成する。これを一般化して、新儒教徒は世界のどこでも空間的にも時間的にも永続的に機能する競技系を形成する。

【正しい競技系の形成】

彼は儒教系統の目的を次のように信仰する。

(1) 新儒教徒が正しい競技系を形成する。

または、新儒教徒が唯一に正当化された善な競技系を形成する。あるいは、新儒教徒が真理である競技系を形成する。この時、新儒教徒はもし彼らがこの競技系で競技するならば、またはもし彼らがこの競技系で生きるならば、彼らは正しく生きることができると信仰する。または、彼らは間違えなく生きることができると信仰する。

【信仰可能な競技系の形成】

彼は儒教系統の目的を次のように信仰する。

(1) 新儒教徒が信仰可能な競技系を形成する。

信仰可能な競技系は新需要である。彼は新儒教という競技系それ自体を信仰の対象になるようにする。新儒教徒は創造主の代わりに新儒教という競技系を信仰する。または、彼らは正しさや善悪の基準を新儒教という競技系に置く。新儒教という競技系はそれ自体が善である。その人工的な世界それ自体が唯一に正当化された善な世界である。この時、人々のほとんどが自然界を正しい世界と感ずるように、新儒教徒は新儒教という競技系を正しい世界と感ずる。

【新儒教の目的に関する権限】

彼は目的の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の目的を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の目的を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の目的を信仰者に授ける。

2章 世界観

以下では、人間界の創造主は儒教系統の世界観を創造する。宗教が異なると、世界観それ自体が異なる。例えば、アブラハムの宗教では、世界は唯一の創造主によって創造された。一般的に、この世界観は創造説と呼ばれている。

また、牧畜や農耕は人間の世界観を形成する。白人は牧畜民族的であり、彼らは牧畜的な世界観を持っている。牧畜民族的な世界観では、この世界には、自由な人と奴隷、家畜と野生動物が存在する。生活形態（生活様式）に関する世界観は労働観にも影響を与えている。実際、白人は労働者として怠惰である。

さらに、近代科学の発達は機械論的な自然観を提示した。西欧白人は世界を理性で機械化させてきた。この機械論的な世界観は国民国家や国民という人工的な国家観を生み出したように思える。その結果として、彼らは動物的なものや人間的なものを排除して、反自然、かつ超人工的な世界を構築してきた。以下では、彼は儒教系統の世界観を提示する。

1節 儒教系統の世界観

【西欧白人の世界観】

彼は西欧白人の世界観を次のように認識する。

- (1) この世界は唯一の創造主によって創造された。
- (2) この世界には、奴隷と自由な人、家畜と野生動物が存在する。
- (3) この世界は自動的（機械的）である。

西欧白人の世界観は創造説である。そこでは、世界は自然には発生しない。神の意志や力のようなある種の人工性が要求される。西欧白人は彼らの正しさの基準を自然を崇拝する多神教徒のように自然界に置かないので、自然界よりも神の言葉がしばしば優先される。

また、西欧白人の世界観は牧畜民族的であり、彼らは奴隷の存在を前提とした社会を形成する。その結果として、自由や自由意志は人間を動物から区別する本質になっている。そして、西欧白人の世界観は機械論的である。この機械論は自然科学や予定説にも関係しているように見える。

【所属と世界観】

彼は所属と世界観に関する思考規範を次のように信仰する。

- (1) もしある主体がx教系統の世界観を信仰しないならば、その主体はx教に所属しない。
- (2) もしある主体が儒教系統の世界観を信仰しないならば、その主体は儒教に所属しない。

現実的には、東洋人は西洋文明に所属していない。なぜなら、彼らはアブラハムの宗教の世界観も牧畜的な世界観も古代地中海文明に世界観も持っていない。彼らが持っているのは、機械論的

な自然観のみであるように見える。実際、大和民族の統治者は西欧文明に所属することに非常に苦労している。このように、世界観は文明的な所属や宗教的な所属に密接に関係する。

【x教系統の世界観】

彼は次を決める。

- (1) x教系統の世界観はx教徒が信仰する世界である。
- (2) 儒教系統の世界観は儒教徒が信仰する世界である。

xをキリスト教と仮定すると、キリスト教系統の世界観はキリスト教徒が信仰する世界である。ここでは、世界は唯一の創造主によって創造された。儒教系統の世界観は下記である。

【儒教系統の世界観の目的】

彼は次を決める。

- (1) 儒教系統の世界観の目的は儒教徒による儒教系統の社会の人工的な形成である。

その目的は世界を正しく説明することでない。儒教徒が共通した世界観を信仰して、儒教系統の社会を形成する。これが儒教系統の世界観の目的である。西欧文明、いわゆる西側に入るためには、キリスト教及び自由民主主義の世界観を共有する必要があるように、東洋文明に入るためには、儒教系統の世界観を共通する必要がある。

(2) たとえある世界観が世界を正しく説明するとしても、もしその世界観がある宗教系統の社会を形成しないならば、その世界観は社会の形成に関して無価値である。

例えば、科学的な世界観は自然界、または物質的な世界を現時点では正しく説明している。しかし、この世界観はある宗教系統の社会を形成しない。そのため、キリスト教的な世界観が残り続ける。白人は科学的な世界観とキリスト教的な世界観を持って、強力に生きている。何のために宗教的な世界観が存在するのかというと、社会形成のためであり、世界を正しく説明することでない。

【x教系統の認識】

彼は次を決める。

- (1) 認識は行為である、かつそこである主体がある対象をすでに把握されている対象に対応させる。
- (2) 認識は行為である、かつそこである主体がある対象をすでに把握されている対象で把握する。
- (3) x教系統の認識はx教徒が行う認識である。
- (4) 儒教系統の認識は儒教徒が行う認識である。

x教徒は世界をx教系統の認識で認識する。例えば、儒教徒の大和民族が大和民族を認識するのは儒教系統の認識によってである。この場合、大和民族がどのような民族であるのかはすでに把握されている。

【物質と動物と人間】

彼は次を認識する。彼は次の思考規範を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は物質的なものを認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は動物的なものを認識する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が人間的なものを認識する。

彼は上記を固定された認識及び初期の認識とする。物質的なものには、太陽や川が存在する。動物的なものには、サピエンスや猫や犬が存在する。人間的なものには、x教系統の人間が存在する。植物や微生物、細菌は分類が難しいが、植物や細菌は物質と動物の間あたりであるように見える。彼はある種の生命のような何かを植物に感じる。

(4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは物質的なものは完全に自動的に運動する。

(5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは動物的なものは非自動的に運動する。

(6) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは人間的なものはより目的的に運動する。

例えば、太陽は完全に自動的に運動しているように見える。一方、動物は非自動的に運動しているように思える。x教系統の人間は目的的に運動しているように見える。言い換えると、物質的なものは機械的なものである。

(7) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは動物的なものは0か1でなく、連続的である。

(8) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは人間的なものは0か1でなく、連続的である。

昆虫は哺乳類よりも機械的に運動しているように見える。狩をするライオンも目的的に運動しているように見える。カラスは木ノ実を道路の上に置いて、車に轆かせる。この運動は極めて目的적이다。ただ、x教系統の人間の目的はより目的적이다。西欧の宣教師を見ればわかるように、宗教を持っている人間はより目的的に運動しているように見える。物質的なものが0か1であるのかは不明である。

【物質と自己の意識】

彼は次の思考規範を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己の肉体を知覚する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己の肉体を認識する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己の感覚（意識）を把握する。
- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは自己の感覚は物質でない。
- (5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは物質でない何かがこの世界に存在する。

肉体は物質である。その主体は自己の肉体を知覚する、かつ認識する。感覚は意識である。感覚には、視界や聴覚、痛みや性欲、感情や記憶が存在する。いわゆる、5覚も感覚である。その主体は自己の感覚を把握する。自己の意識は物質でない。自己の意識は非物質である。実際、視界それ自体は物質でないが、視界を発生させる脳は物質である。物質でない何かの一つは感覚、つまり意識である。

【中の人を仮定する場合】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己の主体（中の人）を把握する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは自己の主体は物質でない。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは自己の主体は感覚（意識）でない。

中的人是は運転手のようなものである。肉体は車体であり、感覚は車内の立体映像のような何かである。その映像は車体によって作られている。この宗教では、彼は視界それ自体と視界を把握する自己を便宜的に区別する。中の人を仮定すると、所有の主体や損害の主体がはっきりとする。視界を発生させる物質的な基盤が存在して、その基盤が視界という非物質を発生させる。そして、その非物質を把握する主体が存在する。この時、自己の視界それ自体は自己でない。

【中の人を仮定しない場合】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が中の人を仮定しないならば、その主体が把握するのは、主体は感覚それ自体である。
- (2) もしある主体が中の人を仮定しないならば、その主体が把握するのは、主体は感覚の性質か何かである。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは自己の肉体と自己の感覚は少なくとも確実に存在する。

例えば、仏教では、無我という考えが存在するらしい。これをうまく解釈すると、自己の視界それ自体が自己である可能性がある。この時、世界に存在するのは、肉体という物質と自己の感覚

(意識) の2つである。中の人を仮定する場合、世界に存在するのは、肉体という物質と自己の感覚(意識) と中の人という3つである。

【儒教系統の宗教的な物語】

彼は儒教系統の世界に関する物語を次のように信仰する。なお、彼は「もしある主体が中の人を仮定しないならば、その主体が、」を省略する。

- (1) 物質は完全に自動的に運動していた。
- (2) 動物が生まれた後、動物は非自動的に運動するようになった。
- (3) 人間が生まれた後、人間は目的的に運動するようになった。

より物語には、初め、物質は物理法則に沿って完全に自動的に運動していた。動物は物質的な世界から少し解放されて、非自動的に運動するようになった。人間は彼らの目的を彼ら自身で創造して、その目的に沿って運動するようになった。

【世界の自動性】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が中の人を仮定しないならば、その主体が認識するのはこの世界の全ては完全には自動的に運動していない。
- (2) もしある主体が中の人を仮定しないならば、その主体が信仰するのはこの世界の全ては完全には自動的に運動していない。

物質は完全に自動的に運動している。動物は非自動的に運動している。人間は目的的に運動している。物質の世界は完全に自動的に運動しているように見えるが、動物と人間はそうでない。彼はこの認識を正しい認識を信仰する。言い換えると、この世界の全ては機械的でない。

【創造説と自然発生説】

彼は次を信仰する。基本的には、彼は創造説を取らない。

- (1) もしある対象が存在するならば、その創造者が存在する。
- (2) もしある儒教徒が上記(1)を信仰するならば、創造者が存在する。

彼が世界をある対象に代入すると、世界の創造者が存在する。この理屈を信用するならば、創造者は存在するかもしれない。

(3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは、世界が創造されたのか、または世界は自然に発生したのかは不明である。

彼は創造説を説教的には採用しない。しかし、彼は世界は自然発生したのかも不明であると現時点では考える。例えば、物質から非物質である意識（感覚）が生まれるのは非常に奇妙である。

【人称に関する現象】

彼は人称に関する現象を次のように把握する。

（1）もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は意識を1人称で把握する、かつその主体は意識を2人称及び3人称で把握しない。

（2）もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は中の人を1人称で把握する、かつその主体は中の人を2人称及び3人称で把握しない。

（3）もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのはxはa人称で把握されるが、xはb人称で把握されない何かがこの世界には存在する。

例えば、彼は他人の意識と他人の主体を外部から把握することができない。しかし、彼は他人も同じ肉体を持っているので、他人も自己と同じ意識や主体を持っているだろうと推論、または憶測してきた。彼はこの推論や憶測を必ずしも前提としない。つまり、彼は上記を人称現象と便宜的に呼び、彼はその現象を奇妙で新しい現象と認識する。つまり、彼は他人の意識や主体は彼視点では把握しない。

【表現する】

彼は表現するを次のように決める。

（1）表現するは行為である、かつそこである主体は1人称で存在する何かを他者に伝達する。

（2）表現するは行為である、かつそこである主体はその主体が1人称で把握する何かを他者に伝達する。

口語的には、表現するとは、ある主体が2人称や3人称ではわからない何かを他者に伝達することである。例えば、自己の認識や自己の判断は2人称や3人称ではわからない。だから、ある主体はその認識や判断を言葉で表現して、他者に伝達する。それが表現することである。

【表現と所属】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

（1）もしある主体が自己の感覚を表現しないならば、その感覚は人間社会に所属しない。

（2）もしある主体が自己の中の人を表現しないならば、その中的人是人間社会に所属しない。

（3）もしある主体が自己のxを表現しないならば、そのxは人間社会に所属しない。

彼は物質社会及び動物社会、人間社会を認識する。上記の場合、その感覚や中的人是動物社会に

所属するかもしれない。しかし、表現しないならば、その感覚や中の人人間社会には存在しないものとして扱われる。なお、人間社会はx教系統の人間社会である。

【人称に関する思考規範】

彼は人称に関する思考規範を次のように信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

- (1) もしある主体が肉体aを持つならば、その主体はその肉体aに対応する意識aを持つ。
- (2) もしある主体が肉体aを持つならば、その主体はその肉体aに対応する中の人aを持つ。
- (3) もしある主体が(1)を信仰するならば、その主体は意識aを持つ。
- (4) もしある主体が(2)を信仰するならば、その主体は中の人aを持つ。

つまり、ある主体は肉体の種類aに対応する意識aを持つ。ある主体は肉体の種類aに対応する中の人aを持つ。上記の意識は感覚である。具体的には、サピエンスはその肉体に対応する種類の意識を持つ。サピエンスはその肉体に対応する種類の中の人を持つ。上記は種類であり、固有性にはあまり関係ない。

(5) もしある主体が(1)を信仰すると表現しないならば、その肉体aに対応する意識aは人間社会に所属しない。

(6) もしある主体が(2)を信仰すると表現しないならば、その肉体aに対応する中の人aは人間社会に所属しない。

もしある主体が「俺の意識は俺の肉体に対応していることを正しいと考える」と表現しないならば、その主体の意識は人間社会には所属しない。ないものとして扱われる。同様に、もしある主体が「俺の中の中人は俺の肉体に対応していることを正しいと考える」と表現しないならば、その主体の中の中人は人間社会には所属しない。

【自由意志と目的意志】

彼は次を決める。

- (1) 自由意志は能力である、かつそこである主体は自動的な運動を非自動的な運動に変化させる。
- (2) 目的意志は能力である、かつそこである主体は非自動動的な運動を目的的な運動に変化させる。

目的意志は便宜的な創作である。一般的には、自由意志は能力である、かつある主体は自己の行為を選択する。目的意志は能力である、かつある主体は自己のある行為を実現する。また、意志は能力であると考えられている。また、能力は必要な対象である。能力が発現するためには、環境のような条件が必要である。さらに、訓練も必要である。最後に、力がその能力を実際に発現させる。発現の流れは能力、訓練、環境、力である。

【感覚としての意志】

彼は意志を次のように解釈する、かつ信仰する。

- (1) 意志は感覚（意識）である。
- (2) 自由意志は感覚（意識）である、かつその感覚が生じるとき、ある主体が自動的な運動を非自動的な運動に変化させることができる。
- (3) 目的意志は感覚（意識）である、かつその感覚が生じるとき、ある主体が非自動的な運動を目的的な運動に変化させることができる。

例えば、意志は視界や痛みのような感覚（意識）の一つである。この解釈では、意志は5覚でない感覚である。ある主体の意志が生じる。その後、その主体はある行為を実行する。

【状態としての意志】

彼は意志を次のように解釈する、かつ信仰する。

- (1) 意志は状態である。
- (2) 自由意志は状態である、かつその状態ではある主体が自動的な運動を非自動的な運動に変化させることができる。
- (3) 目的意志は感覚（意識）である、かつその状態ではある主体が非自動的な運動を目的的な運動に変化させることができる。

意志が状態である場合は次である。例えると、ある主体が意志を持つとき、その主体は意志という服を着ている。服は状態である。その後、その主体は何らかの行為を実行する。どれが正しいのかは不明である。

【力】

彼は力を次のように決める、または信仰する。力は原因である、または力は作用である。一方、能力は必要である。

- (1) 自由意志力は力である、かつそれは自動的な運動を非自動的な運動に変化させる。
- (2) 目的意志力は力である、かつそれは非自動的な運動を目的的な運動に変化させる。

上記の自由意志力や目的意志力が存在するのは不明である。言い換えると、自由意志力は非自動力であり、目的意志力は実現力である。上記を科学に無理やり応用すると、物質意志力は力である、かつそれは非運動を自動的な運動に変化させる。非運動は無な運動でも良いかもしれない。物質意志力は自動力である。

【意志と力】

彼は次を信仰する。

- (1) 意志は必要である。
- (2) 力は原因である。
- (3) 意志と力が存在するとき、ある現象が生じる。

ある種の現象には、非自動的な運動や目的的な運動が存在する。能力があっても、やる気がないのは意志がないのか、力がないのかは不明である。

【非自動的な運動の流れ】

彼は非自動的な運動の流れを次のように信仰する。

- (1) ある主体が存在する、かつその主体は自動的に運動する。
- (2) その主体が自動的な運動を非自動的に運動させることができる状態になる。
- (3) その主体は自動的な運動を非自動的な運動に自由意志力で実際に変化させる。

最後は「その主体は自動的な運動を非自動的な運動に力で実際に変化させる。」であるかもしれない。

【目的的な運動の流れ】

彼は目的的な運動の流れを次のように信仰する。目的が既に与えられていると仮定する。

- (1) ある主体が存在する、かつその主体は自動的に運動する。
- (2) その主体が自動的な運動を非自動的に運動させることができる状態になる。
- (3) その主体は自動的な運動を非自動的な運動に自由意志力で実際に変化させる。
- (5) その主体が非自動的な運動を目的的に運動させることができる状態になる。
- (6) その主体は非自動的な運動を目的的な運動に目的意志力で実際に変化させる。
- (7) その主体は目的的に運動する。

上記が現実であるのかは不明である。簡単には、ある主体は自己の運動を非自動的に変化させた後、その主体は目的的に運動する。例えば、ある主体が目的地に車で到達するつもりであると仮定する。この時、その主体は自己の肉体を非自動的、かつ目的的に運動させていく必要がある。例えば、その主体は自己の肉体を布団から出す必要がある。自動的な世界では、その主体は布団に入ったままである。

【意志と力の系統性】

彼は意志と力の系統性を次のように信仰する。

- (1) 自由意志には、動物的な系統性がある。
- (2) 目的意志には、人間的な系統性がある。
- (3) 自由意志力には、動物的な系統性がある。

(4) 目的意志力には、人間的な系統性がある。

なお、科学的な根拠は上記に存在しない。けれども、虫の非自動的な運動とサピエンスの非自動的な運動は完全には一致しているように見えない。現実的には、人種が異なると、運動の仕方が異なるように、生物種が異なると、非自動的な運動も異なるように思える。または、非自動的に動ける範囲が動物によって異なる。または、自由意志は動物に関して平等であるが、肉体が異なるので、そのように見える可能性もある。

【偶然】

彼は次を信仰する。

(1) 偶然は現象である、かつそれは非自動的な意志や力によって引き起こされる。

彼は現象を存在や状態や運動に置き換える。例えば、交通事故による死は偶然の現象である。また、動物の進化も偶然な現象である。

【必然】

彼は次を信仰する。

(1) 必然は現象である、かつそれは自動的な意志や力によって引き起こされる。

物体を落下させると、その物体は物理法則に沿って運動する。これは必然な現象である。

【確率】

彼は次を認識する。

(1) 確率的な現象は自動的な現象である。

確率的な存在は自動的な存在である。確率的な状態は自動的な状態である。確率的な運動は自動的な運動である。彼は数学的にそうであるのかを知らない。

【必然的な偶然】

彼は次を信仰する。

(1) 必然的な偶然は現象である、かつそれは目的的な意志や力によって引き起こされる。

例えば、子供を10人産むことは必然的な偶然である。なぜなら、それが必ずしも成功するとは限らない。目的は必然に類似するが、その目的は必ずしも実現するとは限らない。彼は必然的な偶

然を實現的な偶然や實現される偶然と言い換える。または、彼は必然的な偶然を實現や實現然と言い換える。

【時間】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は現在を認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は未来を認識する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は過去を認識する。

【時間の順序】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは時間の認識順序は現在、未来、過去である。

例えば、動物は現在のみを知覚する。高等動物は少し先の未来を認識する。x教系統の人間は長期的な未来と過去を認識する。子供は現在と未来を認識するが、過去を認識しない。成長すると、その子供たった人間は自己の過去を認識するようになる。

【現在】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は現在のみを知覚する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は現在のみを検出する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は現在的現在を認識する。

言い換えると、その主体は現在の存在及び状態、運動のみを検出して知覚する。その主体は過去や未来それ自体を知覚しない。

【未来】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は未来を現在の中に認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は未来的現在を認識する。

その主体は未来を種のような存在や状態として認識する。その主体は未来を知覚しない。

【過去】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は過去を現在の中に認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は過去の現在を認識する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は過去を現在から推論する。

その主体は過去を服のような状態として認識する。ある主体は他人を殴ったという服を着ている。その主体は過去を知覚しない。(2)に関しては、もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は過去を現在の状態から推論する。感覚的には、その主体は過去を現在から過去へと推論する。

【時間の流れ】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは、時間の流れは過去、現在、そして未来である。

しかし、上記は人工的な構成や認識、信仰であるかもしれない。歴史は過去から現在へと書かれる。

【空間】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は物理的な空間を認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは動物的な空間が存在する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は人間的な空間を認識する。

彼は動物的な空間が何であるのかを知らない。物理的な空間は科学における空間である。真空が存在するのかわかりません。人間的な空間は宗教や文明、国家や社会、運動競技である。例えば、犬や猫はサッカーの試合を認識していないので、彼らは試合中に乱入する。また、x教系統の人間は共通認識や共通判断で以心伝心のように互いに繋がっているように思える。

【世界観の誤り】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、たとえこの世界観が誤りであるとしても、その主体はこの世界観と新たな分析の結果を両立させる。

どちらかを破棄せずに、儒教徒は世界観と分析の結果を両立させる。分析の結果は儒教系統の社

会を形成しない。世界観が分析を妨害する必要はなく、かつ分析が世界観を破棄する必要はない。

【権限】

彼は世界観の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の世界観を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の世界観を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の世界観を信仰者に授ける。

設計者は人間界の創造主である。

2節 世界の正しさと世界観

【検出】

彼は次を決める。

- (1) 検出するは運動である、かつある対象が別の対象に自動的に応答する。

目が光を検出する。実験器具が化学物質を検出する。

【知覚】

彼は次を決める。

- (1) 知覚するは運動である、かつある主体が自己の感覚を把握する。

主体を中の人と仮定すると、知覚するは運動である、かつある中の人自己の感覚を把握する。例えば、中の人自己の視界を把握することが知覚である。

【知覚の系統性】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは知覚の系統性が存在する。

知覚の系統性は動物的な系統性である。例えば、青い目を持つ主体と黒い目を持つ主体では、色の見え方が異なっている。また、クモの目とタカの目、タコの目とサピエンスの目では、見え方が異なっている。この系統性は主に感覚によって形成される可能性がある。

【知覚の強制】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのはその主体の知覚は自然界によって強制されている。

自然界は物質的な世界である。例えば、太陽があの色であの大きさであるのは自然界によって作られた。ある主体は太陽がそうであることを強制されている。

【検出の強制】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのはその主体の検出は物質的な世界によって強制されている。

彼は光の検出を頼んでいない。けれども、目は光を自動的に検出する。彼はこれを一種の強制と認識する。

【世界の正しさ】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは世界は必ずしも正しくない。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは物質的な世界は必ずしも正しくない。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは動物的な世界は必ずしも正しくない。
- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは人間的な世界は必ずしも正しくない。

例えば、洪水が家族を流すのは彼にとって正しくない。狼が彼の家畜を襲うのは彼にとって正しくない。西欧白人がアメリカ大陸を支配しているのは彼にとって正しくない。虫歯やガンが彼の肉体に存在することは正しくない。もしある法則が彼を殺すならば、その法則は正しくない。

【自然崇拜】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は物質的な世界を崇拜しない。

言い換えると、もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は物質的な世界の存在及び状態、運動を善と判断しない。

【自動性と信用】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は物質的な世界の自動性を信用する。
- (2) もしある対象が自動的に運動するならば、その対象は信用可能である。

彼は物質的な世界は正しいというよりも信用可能であると信仰する。もし彼がサピエンスのある行為を正しくないと感じるならば、なぜ彼は物質的な世界を正しいと感じるのか、物質が正しいのかという問いが存在する。おそらく、物質的な世界は自動的に運動するので、彼はその世界を信用している。

【知覚と認識と判断の不一致性】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは、ある主体aの知覚は別の主体bの知覚と異なる。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは、ある主体aの認識は別の主体bの認識と異なる。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは、ある主体aの判断は別の主体bの判断と異なる。

つまり、知覚と認識と判断は互いに異なる。

【検出の一致性】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、ある主体aの検出は別の主体bの検出に等しい。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは、ある主体aによって検出される対象は別の主体bによって検出される対象に等しい。

上記はおそらく等しいである。知覚や認識や判断は互いに異なるが、検出や検出される対象は互いに等しい可能性がある。つまり、彼らが見ている物質的な世界それ自体は同じであるかもしれない。彼らは同じ物質的な世界に生きている可能性がある。

【知覚と認識と判断の距離】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは距離が知覚に存在する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは距離が認識に存在する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは距離が判断に存在する。
- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのはその距離は連続的である。

その距離は0か1でなく、連続的である。例えば、コーカサス人種とモンゴロイド人種の知覚はコーカサス人種と犬の知覚よりも互いに近い。漢人の認識と日本人の認識は漢人の認識とイギリス人の認識よりも互いに近い。ユダヤ教徒とキリスト教徒の判断はユダヤ教徒と仏教徒の判断よりも互いにより近い。

3章 動物と人間

以下では、人間界の創造主は儒教系統の人間観を創造する。宗教や文明が異なると、何が人間であるのかが異なる。例えば、牧畜民族やアブラハムの宗教では、人間とそうでないものは知能によって区別されているように見える。つまり、知能が人間を動物から区別する。

また、古代地中海文明では、自由意志が人間を動物から区別すると考えられてきたように思える。つまり、人間のみが自由であり、人間でないものは自動的に運動する。自由であることは人間であることである。

あるいは、宗教が人間とそうでないものを区別した。例えば、西欧キリスト教徒でないものは人間でないので、奴隷にして良いという考えが存在した。この考えは黒人奴隷やモンゴロイド人奴隷を導いた。イスラム教でも類似した考えが存在したように思える。以下では、人間界の創造主は儒教系統の人間観を提示する。

1節 儒教系統の動物

【動物観の系統性】

彼は次を信仰する。

- (1) x教系統の動物はx教徒が信仰する動物である。
- (2) 儒教系統の動物は儒教徒が信仰する動物である。

何を動物とするのかは宗教によって異なる。現実的にも、犬や猫を人間のように扱うサピエンスは存在する。

【儒教系統の動物】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

- (1) 儒教系統の動物は対象である、かつそれは意識を持つ、かつ非自動的に運動する。
- (2) 儒教系統の動物は対象である、かつそれは意識を持つ。
- (3) 儒教系統の動物は対象である、かつそれは非自動的に運動する。

上記の(1)は強い定義である。上記の(2)と(3)は弱い定義である。例えば、ウイルスは動物(anima)でない。一方、昆虫は動物である。彼は動物を意識の有無と非自動的な運動で認識する。

【動物的なものの連続性】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは動物性は連続的である。

動物性は0か1でない。例えば、昆虫は哺乳類よりも機械的に運動しているように見える。

【動物と自由意志】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは」を省略する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは動物は自己の自動的な運動を非自動的な運動に変化させている。

動物は自由意志を持つ。動物は非自動力を持つ。

【動物の目的性】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは高等動物の一部は目的的に運動する。

(2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは動物の目的的な運動は連続的である。

例えば、ライオンの狩は目的的である。カラスが木ノ実を道路の上に置いて、車にひかせようとするのも目的的である。そして、その目的的な運動は0か1でなく、連続的である。より高等な動物は目的的に運動しているように見える。

【サピエンス】

彼は次を決める。

(1) サピエンスは動物である。

サピエンスそれ自体はx教系統の人間でない。

【動物の性】

彼は次を認識する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは動物のオス及びメスが存在する。

(2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は動物の性を認識する。

- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は動物のオスを認識する。
- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は動物のメスを認識する。

彼は動物のオスを認識する。彼は動物のメスを認識する。

【性と存在及び状態、運動の系統性】

彼は次を認識する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は動物のオス系統の存在及びメス系統の存在を認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は動物のオス系統の状態及びメス系統の状態を認識する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は動物のオス系統の運動及びメス系統の運動を認識する。

彼は上記を現象へと拡張する。例えば、オス系統の非自動的な運動と目的的な運動が存在する。状態では、肉体の形や筋肉が異なるので、オス系統の状態が存在する。サピエンスを観察するとわかるように、オス系統の運動が存在する。

【野生動物と家畜】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は野生動物を認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は家畜を認識する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は愛玩動物を認識する。

動物には、野生動物と家畜が存在する。さらに、愛玩動物が存在する。愛玩動物には、猫と犬が存在する。家畜には、牛や豚、馬が存在する。昆虫では、蚕が存在する。

【動物の中の人】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは、動物の中の人が存在する。

動物にも、中の人が存在する。正確には、動物の肉体にも、中の人が存在する。ただし、外部はその中の人を把握することができない。おそらく、昆虫にもその視界を把握する主体、つまり中の人が存在するだろう。

2節 儒教系統の人間

【人間観に関する思考規範】

彼は人間観に関する思考規範を次のように信仰する。

(1) もしある主体が任意の人間観を持たないならば、その主体は任意の対象を人間と認識しない。

例えば、動物は任意の人間観を持っていない。この時、動物はこの世の全てを人間と認識しない。ある主体が自己の人間観を持たないことはその主体が誰も人間と認識しないことである。

【x教系統の人間】

彼は次を信仰する。

- (1) x教系統の人間はx教系統の人間性を持つ主体である。
- (2) x教系統の人間はx教系統の人間性を設計者によって授けられた主体である。
- (3) x教系統の人間はx教系統の人間競技に所属する、かつその競技を競技する主体である。

上記の主体は中の人である。日常的には、x教系統の人間はx教系統の人間性を持つサピエンスやそれに類似するヒトである。より日常的には、x教系統の人間はx教徒である。または、(3)の考えでは、人間とはある系統の人間競技をちゃんと競技している主体である。

【サピエンスとx教系統の人間】

彼は次を信仰する。

- (1) サピエンスは動物である。
- (2) サピエンスはx教系統の人間でない。

なお、サピエンスと人間は区別される。サピエンスは服を着ていないが、x教系統の人間は服を着ている。サピエンスは言葉を使用しないが、x教系統の人間は言葉を使用する。サピエンスは善悪を持たないが、x教系統の人間はx教系統の善悪を持つ。

【西欧文明系統の人間観】

彼は西欧文明系統の人間観を次のように認識する。

- (1) 西欧文明における人間は、基本的には、西欧キリスト教系統の人間である。
- (2) もしある主体が人間であるならば、その主体は自由意志を持つ。
- (3) 西欧文明における人間観は牧畜民族的である。

自由意志が人間を動物から区別する。西欧文明では、奴隷の存在が前提とされている。それは牧畜では、野生動物でなく、家畜の存在が前提とされていることに似ている。また、奴隷は自由でない、自由であることが人間とそうでないものを区別している。家畜も自由でない。ここに、キリスト教系統の人間観が乗っている。

(4) 西欧文明における人間観は動物か人間かのどちらかである。

西欧文明における人間観では、人間は動物でない。そのため、性欲それ自体が動物的であると否定される。そこでは、ある主体が人間であることと動物であることは同時には成り立たない。これは0か1のようであり、機械的である。

【儒教系統の人間】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

(1) 新儒教系統の人間はある主体である、かつそれは新儒教系統の人間性を持つ。

(2) 儒教系統の人間は物質性を持つ肉体とサピエンス（モンゴロイド人種）系統の動物性を持つ感覚と儒教系統の人間性を持つ主体との組みである。

上記の主体は中の人である。比喩的には、設計者が新儒教系統の人間性をサピエンスに導入して、人間を設計する、または人間を泥からでなくサピエンスから創造する。物質性は機械性でも良い。ある種系統の動物性はサピエンスである。つまり、儒教系統の人間は物質的なものと動物的なものと人間的なものの組みである。動物性と人間性は対立せずに、組となる。

(3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は新儒教系統の人間性を持つ。

(4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は物質性を持つ肉体とサピエンス（モンゴロイド人種）系統の動物性を持つ感覚と儒教系統の人間性を持つ主体との組みである。

【人間の本質】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

(1) より強い目的意志及び目的力（実現力）は儒教系統の人間を動物から区別する。

(2) 目的的存在と目的的状态、そして目的的运动が儒教系統の人間を動物から区別する。

目的は人間を動物から強く区別する。人間を動物から区別するのは自由でなく目的である。ただし、肉食動物の狩は目的的存在である。人間の運動は最も目的的存在である。だから、最も強い目的が人間を動物から区別する。なお、東洋文明における儒教では、自由は人間を動物から区別しない。なぜなら、彼は野生動物の運動は自動的ではなく、非自動的、つまり自由であると認識する。

(3) 表現された目的は儒教系統の人間を動物から区別する。

日常的には、言語的に表現された目的は人間を動物から区別する。なぜなら、人間のみが言葉を扱う。ライオンやカラスも目的的に運動する。しかし、彼らはその目的を表現していない。

(4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は目的意志及び目的力（実現力）を持つ。

(5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は目的的存在である、かつその主体は目的的な状態である、かつ目的的に運動する。

(6) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は表現された目的を持つ。

【動物からの人間の区別】

彼は次を認識する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは」を省略する。

(1) x教系統の善悪を持つ主体はx教系統の人間を動物から区別する。

(2) x教系統の認識を持つ主体はx教系統の人間を動物から区別する。

善悪や人間も人間を動物から区別する。特に、人間はよりはっきりとした善悪と判断、そして認識をもち、それらを彼らの言葉で表現する。一方、動物は善悪を持たないので、善悪を判断せず、ぼんやりとした認識のみを持っている。さらに、動物は善悪や認識を表現しない。

(3) 表現された善悪は儒教系統の人間を動物から区別する。

(4) 表現された認識は儒教系統の人間を動物から区別する。

【人間と自己認識】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識（または信仰する）するのは」を省略する。(2)以降は認識でなく信仰である。

(1) x教系統の人間は自己認識能力を持つ。

(2) もしある主体が儒教系統の人間であるならば、その主体は自己認識能力を持つ。

または、x教系統の人間は自己を認識している。例えば、動物とx教系統の人間との違いには、自己を認識するのか（self-aware/ness）が存在する。動物は自己を認識していない。例えば、猿は彼ら自身を猿と認識しない。猿は自己を彼らの言葉で表現しない。一方、x教系統の人間は自己をサピエンスと認識している。そして、彼らはその自己を彼らの言葉で表現する。

(3) もしある主体が儒教系統の人間であるならば、その主体は人工及び自然に関する自己認識能力を持つ。

(4) もしある主体が儒教系統の人間であるならば、その主体は人工及び自然に関する儒教系統の自己認識を持つ。

人工や自然に関する自己認識には、人種や民族や宗教や文明が存在する。例えば、その男性は自

己の人種をモンゴロイド人種と認識する。その男性は自己の小人種を東洋小人種と認識する。その男性は自己の民族を大和民族と認識する。その男性は自己の宗教を儒教徒と認識する。その男性は自己の所属文明を東洋文明と認識する。

【人間と表現】

彼は次を認識する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは」を省略する。

- (1) もしある主体が儒教系統の人間であるならば、その主体は自己のxを表現する。
- (2) x教系統の表現はx教系統の人間を動物から区別する。

表現はx教系統の人間を動物から区別する。彼はx教系統の表現を考える。つまり、x教系統の表現はx教系統の人間を動物から区別する。儒教系統の表現は儒教系統の人間を動物から区別する。実際、動物は自己の何かを表現しない。彼らは自己の意識や自己の中の人を持っているかもしれない。しかし、彼らはその何かを表現しない。人間のみが自己の何かを表現する。

【人間の自己認識の表現】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

- (1) もしある主体が彼らの正確な自己を彼らの言葉で表現するならば、その主体は自己認識能力を持つ。
- (2) もしある主体が彼らの正確な自己を彼らの言葉で表現するならば、その主体は人工及び自然に関する儒教系統の自己認識を持つ。

例えば、「俺は俺自身をモンゴロイド人種と認識する。」が存在する。「俺は俺自身が東洋文明に所属していると認識する。」が存在する。表現の形式は「俺は俺のaをbと認識する。」と「俺は俺自身がbであると認識する。」である。

【人間と判断】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

- (1) もしある主体が儒教系統の人間であるならば、その主体は判断能力を持つ。

例えば、動物とx教系統の人間との違いには、善悪の判断を下せるのか (good and evil, judge) が存在する。動物は善悪を持たない。そして、動物は善悪の判断を下すことができない。一方、x教系統の人間はその系統の善悪を持ち、善悪の判断を下す。

【人間と判断の表現】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

(1) もしある主体が善悪の判断を彼らの言葉で表現するならば、その主体は判断能力を持つ。

例えば、「俺はナチスを悪いと儒教系統の善悪で判断する。」が存在する。「俺はアメリカ大陸の多様性を悪いと儒教系統の善悪で判断する。」が存在する。

【意識及び中の人表現】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

(1) もしある主体が「俺は自己の意識を把握している。」と表現しないならば、その主体は自己の意識を持っていない。

(2) もしある主体が「俺は自己の中の人を把握している。」と表現しないならば、その主体は自己の意識を持っていない。

現実的には、彼はその意識や中の人を人間社会には所属していないと信仰する。彼が所属を存在と認識するとき、その意識や中の中人は人間社会には存在していない。言い換えると、次が存在する。

(3) もしある主体が「俺は自己の意識を把握している。」と表現しないならば、その主体の意識は儒教系統の社会、またはx教系統の社会に所属していない。

(4) もしある主体が「俺は自己の中の人を把握している。」と表現しないならば、その主体の中の中人は儒教系統の社会、またはx教系統の社会に所属していない。

ある主体の意識が儒教系統の社会に所属していないとは、その意識が儒教系統の社会には存在しないことである。主体も同様である。分析的には、たとえある主体が自己の意識や主体を表現しなかったとしても、彼らの反応を見ると、彼らは意識や主体を持っている可能性がある。しかし、自己の意識や主体の存在を表現しないならば、意識や主体は人間社会には存在しない。

これは次に似ている。たとえある主体が言論の自由や民主制について語り、西欧文明に所属しているように装うとしても、もしその主体が「俺は西欧文明に所属している。」と表現しないならば、第三者はその主体が西欧文明に所属していると認識する必要がない。その第三者は白人と対峙したくないが、西欧文明に関する責任を負いたくないので、文明的な所属を誤魔化すという句わけに付き合う必要はない。

【認識及び判断の表現と存在】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

- (1) もしある主体が自己の認識と表現しないならば、彼はその主体は自己の認識を持っていない。
- (2) もしある主体が自己の判断を表現しないならば、彼はその主体の自己の判断を持っていない。
- (3) もしある主体が自己の意志を表現しないならば、彼はその主体は自己の意志を持っていない。
- (4) もしある主体が自己の目的を表現しないならば、彼はその主体の自己の目的を持っていない。
- (5) もしある主体が自己のxを表現しないならば、彼はその主体の自己のxを持っていない。

考え方は上記と同様である。たとえある主体がアメリカ先住民と同じモンゴロイド人種であるとしても、もしその主体が「俺は俺の人種をモンゴロイド人種と認識する」と表現しないならば、白人はその主体がモンゴロイド人と認識する必要がない。実際、大和民族を含む東洋人は自己の人種を白人に伝達しないので、誰も彼らをアメリカ先住民と関連づけようとしなない。アメリカ先住民と同じ、または近縁種のモンゴロイド人が存在しないものとなっている。

同様に、もしある主体が自己の意識や主体を把握しているならば、その主体は「俺は自己の主体を把握している。」と「俺は自己の意識を把握している。」と表現する。このとき、その主体と意識は儒教系統の社会、またはx教系統の社会に所属する。当然、自然科学を含む分析では、他者も意識や主体を持っている可能性が高いと結論づけられるだろう。ただ、人間社会では、この可能性は対峙及び責任回避のための文明的な所属の誤魔化しと同じである。彼らは意識や主体を持っているように振舞っているだけである。

【中の人を仮定しない場合における動物と人間の違い】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

- (1) もしある儒教徒が上記の「人称に関する思考規範」を信仰するならば、人間の感覚（意識）は動物の意識と異なる。

この時、x教系統の人間は動物でない。善悪や人間性を創造する感覚こそが人間であることを示す。その感覚こそが人間である。人間の感覚が特別である。または、その感覚を作る物質が特別である。例えば、サピエンスの視界が人間性の象徴である。

【中の人を仮定する場合における動物と人間の違い】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

- (1) もしある儒教徒が上記の「人称に関する思考規範」を信仰するならば、人間の中の中の人とは動物の中の中の人と異なる。

(2) もしある儒教徒が上記の「人称に関する思考規範」を信仰しないならば、人間の中の人は動物の中の人と異なるのかは不明である。

上記の(2)の場合、人間と動物では、中の人は互いに等しいが、肉体が異なる場合がある。この時、動物の中の人も善悪の判断を下す能力を持つが、肉体の制約のために、その中の人は判断を下せない可能性がある。この時、動物を破壊することは人間を破壊することと同じである。

【人間と社会】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは」を省略する。

- (1) もしある主体が儒教系統の人間であるならば、その主体は未来予想能力を持つ。
- (2) もしある主体が儒教系統の人間であるならば、その主体は過去認識能力を持つ。

または、その主体は未来を予想する。その主体は過去を認識する。例えば、動物は長期的な未来を予想できない。一方、x教系統の人間はその未来を予想する。また、動物は過去を認識しない。一方、x教系統の人間は過去を認識する。そのため、x教系統の人間は先祖を認識する。動物は先祖を認識しない。

例えば、ある日本モンゴロイド人の雌が「せっかく、白人と結婚したのに、アジア人みたいな子が生まれてきた。」とひどく驚いて発言小町に投稿する。この種の動物は自己の人種と単純な未来すら予想できない。だから、彼女はモンゴロイド人が白人と結婚して、子供を産むと、半分アジア人のような子供が生まれてくることを認識、予想できない。

- (3) もしある主体が過去を彼らの言葉で表現するならば、その主体は過去認識能力を持つ。
- (4) もしある主体が過去を表現しないならば、その主体は過去を認識していないと信仰する。
- (5) もしある主体が未来を彼らの言葉で表現するならば、その主体は未来予想能力を持つ。
- (6) もしある主体が未来を表現しないならば、その主体は未来を認識していない。

【人間と社会】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは」を省略する。

- (1) もしある主体が儒教系統の人間であるならば、その主体は(x教系統の)社会認識能力を持つ。
- (2) もしある主体がx教系統の社会を彼らの言葉で表現するならば、その主体は(x教系統の)社会認識能力を持つ。
- (3) もしある主体がx教系統の社会を表現しないならば、その主体はx教系統の社会を認識していない。

例えば、犬や猫や鳥はサッカーという競技やサッカー系統の社会を認識していない。そのため、

彼らはサッカーの試合中に試合の中に入り込んでくる。さらに、彼らは彼ら自身が試合に入り込んだことを認識していない。なぜなら、動物は社会それ自体を認識していない。

同様に、白人と結婚したモンゴロイド人の雌は白人の夫や中間種の子供を見せびらかすために、儒教系統の社会にわざわざ入ってくる。そして、彼女はキリスト教やユダヤ教の考えを披露して、「日本は駄目。それに対して、欧米では～」と披露する。なぜなら、彼女らもまた儒教系統の社会を認識できない。

なお、この社会は国家や文明や宗教、地域にも一般化される。東洋文明の中で、西洋文明ごっこを修行することは、サッカーの試合中に入り込んでくる動物と同じである。仏教の寺院でキリスト教ごっこをすることは、サッカーの試合中に入り込んでくる動物と同じである。

【人間性の剥奪】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは」を省略する。

(1) もし設計者、または設計者階級が絶滅するならば、x教系統の人間性はx教系統の人間から奪われる。

場合により、彼は設計者を創造者と言い換える。つまり、創造主を破壊することはx教系統の人間性を破壊することである。x教系統の人間性を破壊することはx教系統の人間を破壊することである。この時、その人間はサピエンスに戻る。

【権限】

彼は人間の設計や創造に関する権限を次のように決める。

- (1) 設計者のみがx教系統の人間を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の人間を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の人間を信仰者に授ける。

創造を設計と置き換えると、(1)は「設計者のみがx教系統の人間を設計する。」である。

4章 自己

以下では、人間界の創造主は儒教系統の自己を提示する。一般的には、自己は自己認識（アイデンティティ）や人種や民族に関係する。自己は社会や国家や文明にも密接に関係する。また、自己は教育における自己形成にも関係する。宗教が異なると、何を自己とみなすのかや自己認識それ自体が異なる。

例えば、仏教では、自己は無我として存在しない。西洋文明では、ユダヤ教徒の白人はユダヤ人になっている。アメリカ国民がまるでアメリカ人のように一種の人種になっている。大和民族には、宗教的、かつ文明的な自己が存在するのかが不明である。白人と結婚した日本モンゴロイド人はまるで白人になったかのように振る舞う。

また、自己は人間を動物から区別する。なぜなら、動物には、自己認識（self-aware）が存在しない。そのため、羊を犬の群れに入れると、その羊はまるで犬になったかのように振る舞う。動物の多くは鏡像認知を持っていない。一方、人間のみが自己を正しく認識する。ここでは、彼は儒教系統の自己を提示する。

1節 儒教系統の自己

【儒教系統の自己】

彼は儒教系統の自己を次のように信仰する。

- (1) 儒教系統の自己は主体それ自体である。
- (2) 儒教系統の自己は肉体と感覚と主体の組みである。

ここでの主体は3種類の何かにおける(3)の主体である。感覚は意識である。つまり、儒教系統の自己はサピエンスの肉体とその肉体に対応する意識（感覚）、そしてその意識を把握する主体の組みである。

【自己の意識と自己】

彼は自己の意識と自己を次のように信仰する。

- (1) 自己の意識が自己それ自体であるのかは不明である。
- (2) もし主体が存在しないならば、自己の意識それ自体が自己であるかもしれない。

なお、主体は自己の感覚それ自体であるのか、主体と自己の感覚は分離されるのかは不明である。しかし、ここでは、彼は自己と自己の感覚を分離して、自己を主体と仮定する。少なくとも、何かを感じる主体は存在するので、彼はその何かを自己と信仰する。

【儒教系統の自己の性質】

彼は儒教系統の自己の性質を次のように信仰する。

- (1) 儒教系統の自己は見えない。
- (2) 儒教系統の自己は知覚されない。

ただし、意識を自己と仮定するならば、儒教系統の自己は見える。なぜなら、自己は視界それ自体である。

【儒教系統の自己と非自己】

彼は儒教系統の自己と非自己を次のように信仰する。

- (1) 儒教系統の自己は他者によって外部から把握されない。
- (2) もしある主体が「俺は俺の主体を自己と把握する。」と表現しないならば、別の主体は彼の主体を自己と信仰しない。
- (3) もしある主体が「俺は自己を把握する。」と表現しないならば、別の主体は彼の自己を信仰しない。

少なくとも、彼はその主体の自己が人間社会に所属すると信仰しない。なお、ここでの主体は中の人のことである。「俺は自己を把握する。」は「俺は自己を把握している。」であるかもしれない。言語的に表現しないならば、彼は他者の自己がx教系統の人間社会に所属していると信仰する必要はない。

【儒教系統の自己の破壊】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある儒教徒の肉体が破壊されるならば、儒教徒の意識及び主体が破壊される。
- (2) もしある儒教徒の肉体が破壊されるならば、儒教徒の自己が破壊される。

上記では、もし肉体が破壊されるならば、意識や主体も連鎖的に破壊される。彼は主体を自己を信仰するので、肉体の破壊は自己の破壊を導く。

【自己と無我】

彼は自己を無我を次のように信仰する。

- (1) 自己が存在する。
- (2) 無我は存在しない。

仏教では、無我という考えが存在するらしい。儒教では、彼は自己の存在を仮定する。

【自己と肉体】

彼は自己と肉体を次のように信仰する。

- (1) 肉体それ自体は自己でない。

たとえ肉体が存在するとしても、意識や主体が存在しないならば、その肉体は無意味である。それは自動運転車と同じである。つまり、彼は肌の色や顔の形、顔それ自体を彼の自己と認識しない。それらは車体の色や形、車体のデザインと同じである。

【自己の性】

彼は自己の性を次のように信仰する。

- (1) 性が自己には存在する。
- (2) 性が自己それ自体であるのかは不明である。

なお、上記は儒教徒の男性系統の性である。

【人種的な自己】

彼は人種的な自己を次のように認識する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己の人種をモンゴロイド人種と認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己の人種の視点をモンゴロイド人種に置く。

彼は自己の人種的な視点をコーカサス人種やネグロイド人種、オーストラロイド人種に置かない。彼は自己の人種をコーカサス人種やネグロイド人種、オーストラロイド人種と認識しない。

- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はアメリカ先住民の人種をモンゴロイド人種と認識する。
- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は東洋小人種をモンゴロイド人種と認識する。
- (5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は東南アジア小人種をモンゴロイド人種と認識する。

より正確には、もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はアメリカ先住民の人種をモンゴロイド人種、またはモンゴロイド人種の近縁種と認識する。

【文明的な自己】

彼は文明的な自己を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその文明的な自己を東洋文明と認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその文明的な自己をモンゴロイド文明と認識する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその文明的な視点を東洋文明に置く。
- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその文明的な視点をモンゴロイド文明に置く。

【宗教的な自己】

彼は宗教的な自己を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその宗教的な自己を儒教と認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその宗教的な視点を儒教に置く。

上記は正確には、新儒教である。

【自己の形成について】

彼は自己の形成を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその文明的な自己を東洋文明で形成する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその宗教的な自己を新儒教で形成する。

つまり、その主体の自己は西欧文明やキリスト教でないので、その主体は西欧文明やキリスト教の考えで自己を形成しない。

【自己と思考規範】

彼は自己と思考規範を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己を認識する。
- (2) もしある主体がx教系統の人間であるならば、その主体は自己を認識する。

自己には、実際の存在に関する自己、宗教的な自己と文明的な自己、人種的な自己や民族的な自己、性的な自己が存在する。自己を正しく認識することはx教系統の人間を動物から区別する。

【自己と文明】

彼は自己と思考規範を次のように信仰する。

(1) もしある主体が文明的であるならば、その主体は自己を持つ。

上記の自己には、文明的な自己と宗教的な自己が主として存在する。

【自己と対峙】

彼は自己と対峙を次のように信仰する。

(1) もしある主体が自己を持たないならば、その主体は他者と対峙することができない。

上記の自己には、主体と文明的な自己や宗教的な自己が存在する。他者と対峙するためには、自己が必要である。

【自己と子供】

彼は自己と子供を次のように信仰する。

(1) もしある主体が子供であるならば、その主体は人工的な自己を持っていない。

そのため、人工的な自己の形成が子供には必要である。彼は子供という期間を自己形成の期間と認識する。

【自己と所属】

彼は自己と所属を次のように信仰する。

(1) もしある主体が自己をxに置くなれば、その主体はxに所属する。

(2) もしある主体が自己の視点をxに置くなれば、その主体はxに所属する。

例えば、もしある主体が自己の視点を西欧文明に置くなれば、その主体は西欧文明に所属する。

【動物の自己認識】

彼は動物の自己認識を次のように信仰する。

(1) もしある主体が動物であるならば、その主体は知覚したものを自己と認識する。

言い換えると、動物は周りのものに憑依して、それを自己と思い込む。犬の中の羊は自己を犬と思い込む。なぜなら、その羊の視界には、犬のみが写っているの、羊はその写っている対象を自己と認識する。白人と結婚した日本モンゴロイド人の視界には、白人が写っているの、その雌は白人を自己と思い込む。関西人は他人を自分と呼ぶ。なぜなら、関西人の視界には、他人が写っているの、その他人を自己と思い込む。その他には、偽名や民族や人種の背乗り、憑依が存在する。また、視界を自己と認識するのも、(1)の結果であるかもしれない。

【自然な自己と人工的な自己】

彼は自然な自己と人工的な自己を次のように信仰する。

- (1) 自然な自己と人工的な自己が存在する。

自然な自己には、サピエンスという生物種や人種や民族、動物的な性、主体や意識を含む儒教系統の自己が存在する。人工的な自己には、宗教や文明や国家に関する自己が存在する。

【物質的な自己と動物的な自己と人間的な自己】

彼は物質的な自己と動物的な自己と人間的な自己を次のように信仰する。

- (1) 物質的な自己と動物的な自己と人間的な自己が存在する。

物質的な自己には、自己の肉体が存在する。動物的な自己には、人種や民族や動物的な性が存在する。宗教的には、自己の意識や主体が存在する。人間的な自己には、宗教や文明や人間的な性が存在する。人間的な自己は主体によって創造される。

【自己と責任能力】

彼は自己と責任能力を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が自己を持たないならば、その主体は責任能力を持っていない。

責任能力には、対峙義務と応答義務、後始末義務や予防義務が存在する。

【自己と破壊】

彼は自己と破壊を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が自己を持たないならば、その主体は原理的に破壊されない。

たとえその主体が破壊されても、その主体は自己を持たないので、その行為は破壊行為でない。もしある主体が自己を持たないならば、たとえその主体が破壊されるとしても、その行為は自己破壊行為でない。

【自己不安】

彼は自己不安について次のように認識する。

- (1) サピエンスと呼ばれる個体は不安を自己に覚える。

- (2) その個体は自己から逃避する。
- (3) その個体は自己それ自体を否定する。

具体的には、その個体は自己の人種や自己の民族、自己の国家や自己の宗教や自己の文明に不安を覚える。彼はこの不安を自己不安と呼ぶ。

- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己不安を統治する。
- (5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己不安から逃避することを悪いと判断する。

【自己と統治】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が自己を持たないならば、その主体は別の自己に従う。
- (2) もしある主体が自己を持たないならば、その主体は自己の何かを形成しない。

従うは統治されるであるかもしれない。形成しないは形成することができない、または、形成する能力を持たないであるかもしれない。例えば、日本国の報道は自己を形成する能力を持っていないので、彼らは報道の自由を主張するが、彼らは西欧視点で報道している。この場合、彼らは東洋視点をもつ主体に従う。

【自己の正当性】

彼は次を信仰する。

- (1) 彼は儒教系統の自己の善性を正当化する。
- (2) もしある主体の自己の善性が正当化されないならば、その主体の自己は崩壊する。

例えば、もし西欧文明の自己の善性が正当化されないならば、西欧文明の自己は崩壊する。この時、西欧文明それ自体が崩壊する。アメリカ合衆国の場合、もし西欧白人がモンゴロイド人種の自然な生息地で民主制や国民国家やキリスト教系統の法体系を強制していることの善性を正当化することができないならば、アメリカ合衆国自体がその正当性を失い、崩壊する可能性がある。

【自己と境界】

彼は次を信仰する。

- (1) もし自己の境界が消えるならば、自己それ自体が消える。

例えば、ローマ人やフェニキア人は他者と民族的な境界を失って、どこかへと消えてしまった。

【主権と自己】

彼は次を信仰する。

- (1) もし主権が存在するならば、自己が存在する。

もし主権が存在するならば、自己に関する主権が存在する。言い換えると、たとえ主権が存在するとしても、もし自己が存在しないならば、意味がない。また、たとえ主権が存在するとしても、もしその主権が非自己に関する主権であるならば、その主権は意味がない。

【自己侵害】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己に対する侵害（自己侵害）を悪いと判断する。

【自己の欠如の非自己の認識】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が自己のxを持たないならば、その主体は非自己のxを認識していない、またはそのxを正確に認識していない。

例えば、もしある主体が自己の意識を持たないならば、その主体は非自己の意識を認識していない。他人に意識が存在すると感じるのは、自己の意識が存在するからである可能性がある。また、もしある主体が自己の文明を持っていないならば、その主体は西欧文明におけるある現象をみて、その現象を非自己の文明における現象を認識していない。

【権限】

彼は自己の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の自己を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の自己を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の自己を信仰者に授ける。

5章 善悪

以下では、人間界の創造主は儒教系統の善悪を提示する。一般的に、宗教が異なると、善悪が互いに異なる。例えば、キリスト教では、平等が善であるが、儒教では、平等は善でない。宗教を運動競技と例えると、日常的にも、サッカーのレッドカードはバスケのレッドカードと異なる。例えば、サッカーでは、ボールを持つことは悪であるが、バスケでは、その行為は悪でない。

また、政治的な善悪では、西欧白人が統治者をアメリカ大陸で担い、アメリカ大陸の資源を所有して、利益を獲得していることが存在する。また、彼らが原爆をアメリカ大陸から投下して、大和民族と呼ばれる多くのモンゴロイド人種を虐殺したことが存在する。これらの善悪を判断するためには、ある種の主体が善悪の基準を創造する必要がある。ここでは、彼は儒教系統の善悪を提示する。

1節 儒教系統の善悪

【正しさに関する原初的な状態】

彼は正しさに関する原初的な状態を次のように認識する。

- (1) サピエンスと呼ばれる個体は知覚した対象を正しいと感じる。
- (2) サピエンスと呼ばれる個体は把握した対象を正しいと感じる。

言い換えると、その個体は見たものや聞いたものや感じたものを正しいと感じる。だから、彼らは太陽の存在や状態や運動を正しいと感じる。彼らは物理法則を正しいと感じる。彼はこれらを現状崇拝や自然崇拝と認識する。

【善悪の芽生え】

彼は善悪の芽生えを次のように信仰する。

- (1) 善悪の芽生えはある対象に対するある主体の違和感である。

例えば、洪水がサピエンスを押し流す。狼が家畜を襲う。病気が子供を殺す。西欧白人がアメリカ大陸で資源を所有している。西欧白人が他人を差別主義者と侮辱する。ある主体がこれらの存在や状態や運動に違和感を覚える時、善悪や正しさが芽生える。違和感を覚えない場合は下記である。

- (2) もしある主体が自然を崇拝するならば、その主体は善悪を持たない。
- (3) もしある主体が把握する存在や状態や運動を崇拝するならば、その主体は善悪を持たない。

上記の自然は現状でも良い。一般的には、サピエンスと呼ばれる個体は把握したものを正しいと無意識的に感じるように見える。だから、彼らは太陽や物理法則や自然界を正しいと感じる。

【善悪の基準の芽生え】

彼は善悪の（原初的な）基準の芽生えを次のように信仰する。

(1) 善悪の基準は主体の違和感である。

上記の場合、違和感それ自体が悪である。違和感を覚えないのが悪でない。例えば、西欧白人が有色人を差別主義者と侮辱する時、彼は違和感を覚える。それぞれの主体は違和感をそれぞれに覚える。この時、どの主体の違和感が正しいのかという問題が生じる。

(2) 創造主の違和感が正しい違和感である。

(3) 善悪の基準は創造主の違和感である。

創造主には、競技系の創造主が存在する。もしこの世界の創造主が存在するならば、その違和感が正しい違和感である。正しい違和感は違和感の善性が唯一に正当化される違和感であるかもしれない。日常的には、違和感に基づいたシステムを作れる主体の違和感はそのシステムの中で正しい。

【善と目的】

彼は善と目的の関係を次のように信仰する。

(1) 目的はある主体が実現するつもりである対象の存在や状態や運動である。

(2) 目的は善を導く。

西欧白人が他人を差別主義者と侮辱する時、彼は違和感を覚える。彼は西欧白人が他人を差別主義者と侮辱しない状態を悪いと判断しない。さらに、彼は理想的な状態を設定して、その状態を目的とする。この時、その状態に沿うことが善になる。

(3) 目的に沿うことが善である。

(4) 目的に反することが善でない。

例えば、サッカーでは、球を足でゴールに入れることが目的である。だから、選手が球をけて、その球をゴールに入れることが善である。もし創造主がこの世界を平等になるように創造したならば、平等な状態は創造主の目的に沿うので、善である。

【悪と目的】

彼は悪と目的を次のように信仰する。

(1) 目的を妨害することは悪である。

(2) 違和感は悪である。

または、目的の実現を妨害することは悪である。正確には、違和感は悪である場合がある。

【目的の基準】

彼は目的の基準を次のように信仰する。

- (1) 創造主の目的がその競技系の中で正しい。

言い換えると、システムの創造主が作った目的がその競技系の中で正当化される。目的は善悪を導くので、その善悪も創造主から正当化される（断定化される）。違和感と同様に、どの目的が正しいのかという問題が生じる。彼はシステムを作れる創造主の目的がシステムの中で正しいと信仰する。

【違和感と目的の宗教的な基準】

彼は違和感と目的の宗教的な基準を次のように信仰する。

- (1) 正しい主体が存在するならば、その主体が正しい違和感と正しい善悪を生み出す。

言い換えると、違和感と善悪の正しさや正当化は正しい主体によって行われる。正しい主体とそうでない主体が存在する。正しい主体が正しい違和感と正しい善悪を生み出す。

【儒教系統の善悪】

彼は儒教系統の善悪を次のように信仰する。

- (1) x教系統の善悪はx教徒が信仰する善悪である。
- (2) 儒教系統の善悪は儒教徒が信仰する善悪である。

悪の場合、違和感が存在する。違和感を宗教に関連させると、x教系統の違和感と儒教系統の違和感が存在する。

【儒教系統の目的】

彼は儒教系統の目的を次のように信仰する。

- (1) x教系統の目的はx教徒が信仰する目的である。
- (2) 儒教系統の目的は儒教徒が信仰する目的である。

【目的と善悪の関係】

彼は目的と善悪の関係を次のように信仰する。

- (1) x教系統の目的がx教系統の善悪を導く。
- (2) 儒教系統の目的が儒教系統の善悪を導く。

x教系統の違和感と儒教系統の違和感もx教系統の悪や儒教系統の悪を導く。

【善悪と性】

彼は善悪と性を次のように信仰する。

- (1) x教教徒の男性系統の善悪が存在する。
- (2) 儒教系統の男性系統の善悪が存在する。

x教徒の女性系統の善悪と目的は彼女ら自身によって形成される。

- (3) x教教徒の男性系統の目的が存在する。
- (4) 儒教系統の男性系統の目的が存在する。

ここでの善悪や目的の全ては儒教徒の男性系統の善悪及び目的である。

【礼と儒教系統の善悪】

彼は礼と儒教系統の善悪を次のように信仰する。

- (1) 礼に沿うことが善である。
- (2) 礼に反することが善でない。

礼に沿うことが善である。または、礼に沿う対象の存在及び状態、運動が善である。礼に反する対象の存在及び状態、運動が善でない。なぜなら、礼が儒教系統の目的の一つである。

なお、彼は儒教系統の悪を次のように信仰する。

- (3) 失礼は悪い。
- (4) 無礼は強く悪い。
- (5) 非礼は非常に強く悪い。

または、失礼は少し悪い。無礼は悪い。非礼は非常に悪い。例えばサッカーである。失礼→笛（ファール）。無礼→イエローカード。非礼→レッドカード。

【陰陽一体】

彼は善悪と陰陽を次のように信仰する。

(1) もしある主体が悪を実行するならば、ある儒教徒はより悪を実行する。

または、もしある主体が悪を儒教徒に実行するならば、ある儒教徒はより悪をその主体に実行する。

【真理】

彼は真理を次のように信仰する。

(1) 真理は唯一に正当化される善である。

または、真理は唯一に正当化される善悪である。悪の場合、悪と唯一に断定される。例えば、平等が善であるのか、悪であるのかは、自然界を調べるとしても、明らかにならない。真理は自然界を正確に表現することではなく、どの善悪が正しいのかを決定することに近い。もし唯一に正当化される善な人間性が存在するならば、その人間性を受け継いできた人間が善である。その人間が正しい人間である。

【善悪と事実】

(5) 善悪は事実によって正当化されない。

たとえある主体が事実を提示するとしても、その事実は善悪を正当化しない。例えば、ある主体はナチスを悪いと判断することをその主体の善悪から導く必要がある。「ナチスは多くの人々を殺した。」は説明であり、善悪の判断でない。その主体は「俺はナチスを悪いと儒教系統の善悪で判断する。」と表現する。

【目的行為】

彼は目的行為を次のように信仰する。

- (1) x教系統の目的行為は行為である、かつそれはx教系統の善悪を持つ。
- (2) x教系統の目的状態は状態である、かつそれはx教系統の善悪を持つ。
- (3) x教系統の目的存在は存在である、かつそれはx教系統の善悪を持つ。

彼は行為を非自動的な運動や自由運動とする。同様に、彼は自由状態や自由存在を仮定する、または信仰する。彼は彼は次を信仰する。

- (4) x教系統の目的行為は行為に優越する。
- (5) x教系統の目的状態は自由状態に優越する。
- (6) x教系統の目的存在は自由存在に優越する。

言い換えると、善悪は非自動性に優越する。ただし、生成の順序は自動、非自動、目的である。

【思考規範】

彼は次の思考規範を信仰する。

(1) もしある主体が自己のx教系統の善悪を持っていないならば、その主体が存在や状態や運動の善を正当化する可能性は0である。

(2) もしある主体が自己のx教系統の善悪を持っていないならば、その主体が存在や状態や運動の悪を断定する可能性は0である。

【善悪の手引き化】

彼は善悪の使い方を次のように信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は善悪の判断を代数計算のように手引き化する。

彼は善悪の判断の順序を次のように信仰する。

- (2) ある主体は現象を知覚する。
- (3) その主体は現象を認識する。
- (4) その主体は現象の善悪を判断する。

【善悪と階級】

彼は善悪と階級を次のように信仰する。

- (1) 任意の階級がx教系統の善悪を所有する。
- (2) 統治者階級が下す善悪の判断は選手階級が下す善悪の判断よりも強い。

つまり、統治者階級が下す善悪の判断は選手階級が下す善悪の判断に優越する。

【善悪の使用の主体】

彼は善悪の使用の主体を次のように信仰する。

- (1) 儒教系統の善悪を使用する主体は儒教徒である。
- (2) x教系統の善悪を使用する主体はx教徒である。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は異教徒が儒教系統の善悪を使用することを無礼、または非礼と認識する。

【位置と善悪の性質】

彼は善悪の性質を次のように信仰する。

- (1) ある主体の位置は善悪及び善悪の判断を変化させる。
- (2) ある主体の方向は善悪及び善悪の判断を変化させる。
- (3) ある主体の歴史は善悪及び善悪の判断を変化させる。

言い換えると、善悪及び善悪の判断はある主体の位置に関係する。善悪及び善悪の判断はある主体の方向に関係する。善悪及び善悪の判断はある主体の歴史に関係する。例えば、欧州人がモンゴロイド人を欧州から侮辱することの善悪は欧州人がモンゴロイド人をアメリカ大陸から侮辱することの善悪と異なる。後者はより悪い。

【善悪と連続性】

彼は善悪と連続性を次のように信仰する。

- (1) 善悪は連続的である。
- (2) 善悪は0であるか、0であるかでない。

なお、目的も連続的である。カラスやライオンの運動の一部は目的的である。カラスは実を道路の上に置いて、車に割らせようとする。この行為は目的的であるように思える。サピエンス、またはx教系統の人間のみが目的的でなく、彼らはより目的的である。

【善悪とその否定】

彼は次のように信仰する。

- (1) 善の否定は善でない。
- (2) 悪の否定は悪でない。

善の否定は悪であるでない。

【善悪と人間性】

彼は次のように認識する。

- (1) 言語的に表現された善悪はx教系統の人間を動物から区別する。
- (2) 言語的に表現された目的はx教系統の人間を動物から区別する。

言い換えると、人間の本質は善悪である。善悪は目的から導かれる。だから、人間の本質は目的である。

【未開民と善悪】

彼は次のように信仰する。

- (1) 未開民は不安を悪と感じる。
- (2) 未開民は安心を善と感じる。

【子供と大人】

彼は子供と大人と善悪を次のように信仰する。

- (1) 善悪の芽生えが子供には存在しない。
- (2) 子供は善悪の判断を下さない。
- (3) 善悪は大人を子供から区別する。
- (4) 目的は大人を子供から区別する。

【権限】

彼は善悪の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の善悪を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の善悪を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の善悪を信仰者に授ける。

信仰者には、統治者階級と選手階級が存在する。

6章 性

以下では、人間界の創造主は儒教系統の性を提示する。一般的に、宗教が異なると、性のあり方や性に対する認識や信仰が異なってきた。例えば、サウジアラビアを西欧と比較するとわかるように、イスラム教における性とキリスト教における性と仏教における性は互いに異なっている。また、西欧におけるLGBTは東洋における男色と異なっている。以下では、彼は儒教系統の性を提示する。

1節 儒教系統の性

【動物的な性と人工的な性】

彼は性を次のように認識する、信仰する。

- (1) 動物的な性と人間的な性が存在する。

動物的な性には、サピエンスの雌と雄が存在する。人間的な性には、女と男が存在する。例えば、雄らしさは筋肉や男性ホルモンである。しかし、その雄らしさは男らしさと異なる。何が女らしいか、何が男らしいかは宗教や文明によって異なる。

- (2) 動物の雌と動物の雄が存在する。
- (3) x教系統の女とx教系統の男が存在する。
- (4) x教系統の性が存在する。

彼は動物の雌と動物の雄を認識する。彼はx教系統の女とx教系統の男を信仰する。彼は動物的な性を認識する。彼は人間的な性を信仰する。x教系統の性には、キリスト教系統の性やイスラム教系統の性やユダヤ教系統の性、ヒンドゥー教系統の性や仏教系統の性が存在す流。

【儒教系統の性】

彼は儒教系統の性を次のように信仰する。

- (1) 儒教系統の性は儒教徒が信仰する性である。
- (2) 儒教系統の男はサピエンスの雄と儒教系統の男の組みである。
- (3) 儒教系統の女はサピエンスの雌と儒教系統の女の組みである。
- (4) 儒教系統の性は動物的な性と儒教系統の性の組みである。

上記を区別する時、彼は儒教系統の男 = (サピエンスの雄、儒教系統の男性) と表示する。彼は儒教系統の女 = (サピエンスの雌、儒教系統の女性) と表示する。なお、基本的には、サピエンスはモンゴロイド人種である。

【性に対する認識】

彼は性に対する認識を次のように認識する。

- (1) サピエンスの雌はサピエンスの雄と異なる。
- (2) サピエンスの雌とサピエンスの雄は互いに平等でない。

彼は儒教系統の性を次のように信仰する。

- (3) 儒教系統の男は儒教系統の女と異なる。
- 儒教系統の男と儒教系統の女は互いに平等でない。

なお、西欧文明では、キリスト教系統の男とキリスト教系統の女は互いに平等である。

【男女自立】

彼は男女の自立に関して次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の男性と儒教系統の女性は大局的に自立させる。
- (2) もしあるx教系統の性が大局的に自立しないならば、その性は大局的に自立する性に従う。

例えば、儒教系統の女性は自己の組織や自己の社会、自己の国家を彼女ら自身で形成する。なお、(2)に関して、もしある主体が儒教徒であるならば、をつけても良いかもしれない。

【性の区別】

彼は性の区別を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は雌と雄を区別する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は雌と雄をより分岐させる。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の男性と儒教系統の女性を区別する。
- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の男性と儒教系統の女性をより分岐させる。

【性の区別の具体例】

彼は性の区別の具体例を提示する。

- (1) 儒教系統の男性の目的と儒教系統の女性の目的が存在する。
- (2) 儒教系統の男性の世界観と儒教系統の女性の世界観が存在する。
- (3) 儒教系統の男性の人間と儒教系統の女性の人間が存在する。
- (4) 儒教系統の男性の自己と儒教系統の女性の自己が存在する。
- (5) 儒教系統の男性の善悪と儒教系統の女性の善悪が存在する。

その他には、次がある。

- (6) 儒教系統の男性の認識と儒教系統の女性の認識が存在する。
- (7) 儒教系統の男性の判断と儒教系統の女性の判断が存在する。
- (8) 儒教系統の男性のxと儒教系統の女性のxが存在する

xには、国家や国籍、言語や文字が含まれる。

【儒教系統の女性】

彼は儒教系統の女性を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教系統の女性であるならば、その主体は儒教系統の女性を彼女自身で創造する。

上記の創造するは形成するであるかもしれない。

【男女の関係】

彼は男女の関係を次のように信仰する。

- (1) 男女の関係は信頼によって形成される。

正確には、男女の関係は性に関する信頼によって形成される。性に関する信頼は性的信頼であるかもしれない。男女の関係は愛でない。西欧キリスト教では、男女の関係には、愛が存在する。愛が男女の関係を特徴付ける。

【意識の性と主体の性】

彼は意識の性と主体の性を次のように信仰する、または仮定する。

- (1) もし意識aが肉体aに対応するならば、意識の性が存在する。
- (2) もし主体aが肉体aに対応するならば、主体の性が存在する。

この時、雌の意識と雄の意識が存在する。雌の主体と雄の主体が存在する。

【性の内面と外面】

彼は性の内面と外面を次のように信仰する。

- (1) もし意識aが肉体aに対応するならば、意識aの性は肉体aの性に対応する。
- (2) もし主体aが肉体aに対応するならば、主体aの性は肉体aの性に対応する。

上記では、彼は性を意識と主体に導入した。上記の意識の性と主体の性はサピエンスの性に対応する。なお、上記は正確には、もしある主体が意識aが肉体aに対応するを信仰するならば、である。同様に、もしある主体が主体aが肉体aに対応するならば、である。

【性欲とその管理】

彼は性欲とその管理を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は性欲それ自体を悪いと判断しない。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその主体自身が性欲それ自体を管理する、かつ統治することを善と判断する。

特に、彼は人間的な性欲を悪いと判断しない。彼は儒教系統の性欲を仮定する。

【性の主義化】

彼は性と主義を次のように認識する、信仰する。

- (1) 性は主義でない。
- (2) 性は生物的事実とそれに対する認識の組みである。

日常的には、性は生物的事実である。なお、上記は儒教系統の性でもある。

【性の変更と選択】

彼は性の変更と選択を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の性を短期的には変更することができない。
- (2) 性は選択される何かでない。

サピエンスの性、つまり動物的な性は短期的には変えられない。少なくとも、数万年から数百万年が必要であるように思える。それに対して、人間的な性の方はより短期的である。

【権限】

彼は性の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の性を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の性を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の性を信仰者に授ける。

上記の設計者は創造者でもある。

2節 儒教系統の男性

【儒教系統の男性】

彼は儒教系統の男性を次のように信仰する。

- (1) 弱男性と強男性が存在する。
- (2) 弱男性と強男性は1と0でなく、連続的である。

彼は儒教系統の男性を弱男性と強男性に分類する。

【雄性】

彼は儒教におけるサピエンスの雄を次のように認識する、または信仰する。

- (1) 雄は筋肉を持つ。
- (2) 雄は頑丈な骨格を持つ。
- (3) 雄は適度な男性ホルモンを持つ。

その他には、空間把握能力などが存在するように思える。

【被害者ぶる】

彼は被害者ぶるを次のように信仰する。

- (1) もしある主体が被害者ぶるならば、その主体は儒教系統の男性でない。
- (2) 被害者ぶることは女々しい。

【善悪と認識】

彼は善悪及び認識と儒教系統の男性を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教系統の男性であるならば、その主体は対象や現象を儒教系統の善悪で判断する。
- (2) もしある主体が儒教系統の男性であるならば、その主体は対象や現象を儒教系統の認識で認識する。

【強男性】

彼は強男性を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が強男性であるならば、その主体は自己を創造する。

(2) もしある主体が強男性であるならば、その主体は何かを創造する。

強男性は創造主である。上記は宗教的である。

(3) もしある主体が強男性であるならば、その主体は他者と対峙する。

(4) もしある主体が強男性であるならば、その主体は自己を持っている。

正確には、その主体は他者と社会的に宗教的に国家的に文明的に対峙する。上記は日常的である。強男性は他者と対峙する。そして、強男性は他者と対峙するための自己を持っている。

(5) もしある主体が強男性であるならば、その主体は生存競争に強い。

(6) もしある主体が強男性であるならば、その主体は強力な社会を形成する。

(7) もしある主体が強男性であるならば、その主体は対象を統治する。

【強男性2】

彼は強男性を次のように信仰する。

(1) もしある主体が強男性であるならば、その主体は人種及び民族、部族に厳格である。

(2) もしある主体が強男性であるならば、その主体は性に厳格である。

(3) もしある主体が強男性であるならば、その主体は宗教及び社会、国家、文明に厳格である。

強男性でない主体は人種や民族や部族に関してデタラメである。例えば、彼らは日本人や中国人という単語を大和民族とも日本国民とも取れる意味で使用する。また、その種の主体はスペイン系フィリピン人や「私の白人夫とハーフの子供を日本人としてほしい」みたいな電波を発してくる。

【弱男性】

彼は弱男性を次のように信仰する。

(1) もしある主体が弱男性であるならば、その主体は戦争に強い。

(2) もしある主体が弱男性であるならば、その主体は高度なテクノロジーを持つ。

上記は西欧白人である。

(3) もしある主体が弱男性であるならば、その主体は競争的である。

(4) もしある主体が弱男性であるならば、その主体は仕事ができる。

(5) もしある主体が弱男性であるならば、その主体は富裕である。

【弱男性と職業】

彼は弱男性と職業を次のように信仰する。

- (1) 次のxは強男性でない。
- (2) 次のxは弱男性である可能性がある。

xには、軍人や商人、学者や教師、医者や弁護士、報道関係者が存在する。ただし、軍人は商人よりも対峙的であるので、軍人は比較的にはより弱男性でない。

- (3) もしある主体の職業が媒介であるならば、その主体は強男性でない。

例えば、媒介的な職業には、学者や教師、医者や弁護士、報道関係者、金融関係者が存在する。媒介的な職業は依存者である。

【西欧白人に対する認識】

彼はキリスト及びユダヤ教系統の西欧白人男性を次のように認識する。

- (1) キリスト及びユダヤ教系統の西欧白人男性は強男性でない。
- (2) キリスト及びユダヤ教系統の西欧白人男性は弱男性である。

彼らは被害者ぶる。彼らは彼ら自身を被害者において、相手を加害者に仕立て上げて、糾弾する。さらに、彼らは異常に攻撃的である。この種の性質は男性的でなく、どこか女々しい。ただし、彼らはサピエンスの雄的である。彼らは戦争に強いが、生存競争に弱い可能性がある。言い換えると、彼らは脆い。

【中東人に対する認識】

彼はイスラム教系統の中東人男性を次のように認識する。

- (1) イスラム教系統の中東人男性は強男性である可能性がある。

彼らは生存競争に強い可能性がある。また、メソポタミアあたりの中東人はあまり被害者ぶらない。

【敵味方】

彼は敵味方を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が強男性であるならば、その主体は敵と味方を正しく認識する。

弱男性は敵と味方を認識することができない場合がある。

【意志と力】

彼は意志と力を次のように信仰する。

- (1) 儒教徒の男性系統の意志が存在する。
- (2) 儒教徒の男性系統の力が存在する。
- (3) 儒教徒の男性系統の主体が存在する。

主体は力の原因やその原因となる存在である。儒教徒の男性系統の主体が儒教徒の男性系統の意志という状態を生み出す。その後、その主体は儒教徒の男性系統の力を実行する。存在→状態→力という流れが存在する。これは上記の性の区別の具体例に依存する。

7章 富と所有

以下では、人間界の創造主は儒教系統の富を創造する。一般的に、宗教が異なると、富のあり方や富の取り扱いが異なる。例えば、イスラム教では、利子が禁じられているらしい。キリスト教では、お金儲けがあまり好まれていない。一方、ユダヤ教やヒンドゥー教では、この種の禁忌は存在しないように見える。近代以降、キリスト教プロテスタント派系統の富の考え「資本主義」が生み出された。

また、宗教や人種、文明が異なると、何が富であるのかも異なる。例えば、アブラハムの宗教では、牧畜という生活形態のためか、奴隷が一つの富とされてきたように見える。実際、黒人奴隷やモンゴロイド人奴隷は富として扱われてきた。現在では、x教系統の人間を要素とする会社やサッカーチームも一つの富として扱われてきた。さらに、肉体を動産のように扱うのかも宗教によって異なるように思える。

さらに、所有は次の問いを導く。アメリカ大陸の西欧白人がアメリカ大陸の資源をアメリカ先住民を押しつけて所有していることの善性は正当化されるのかである。以下では、彼は儒教系統の富を提示する。

1節 儒教系統の所有

【所有】

彼は次を信仰する。

(1) ある対象を所有するとは、ある状態である、かつそこで所有の主体はその対象をその主体の意志で運動させることができる。

その状態はa-bのように線のような関係で表示される。その主体の意志は、正確には、その主体の自由意志及び目的意志、そして自由力と自由意志である。

【所有の系統性】

彼は次を決める。

- (1) x教系統の所有はx教徒が実行する所有である。
- (2) 儒教系統の所有は儒教徒が実行する所有である。

【所有の性】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はx教徒の男性系統の所有をx教徒の女性系統の所有から区別する。

儒教には、女性系統の所有と男性系統の所有が存在する。

【所有の主体】

彼は所有の主体を次のように信仰する。

- (1) 所有の主体は上記「3種類の何か」の(3)における主体(中の人)である。
- (2) 特に、所有の主体はx教系統の人間性を持つ主体(中の人)である。

儒教の場合、所有の主体は儒教系統の人間性を持つ主体(中の人)である。

【所有に関する思考規範】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が対象を所有するならば、その主体はその対象をその主体の自由意志と自由力で運動させる。
- (2) もしある主体が対象を所有するならば、その主体はその対象をその主体の目的意志と目的力で運動させる。

または、もしある主体が対象を所有するならば、その主体はその対象をその主体の意志と力で運動させることができる。もしある主体が対象を所有するならば、その主体はその対象をその主体の目的意志と目的力で運動させることができる。

【自己と所有に関する思考規範】

彼は自己と所有に関する思考規範を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が自己を持たないならば、その主体は対象を所有しない。
- (2) 所有の主体は主体(中の人)である。

何かを所有するためには、対象を所有する自己が必要である。上記の主体は日常的な意味での主体であり、中の人でない。彼はその主体を中の人(主体)と信仰する。なお、その主体の自己が表現されている必要がある。

【意識と肉体の所有】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己の肉体を所有する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己の意識を所有する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己の中の人を自己所有する。

中の人が自己の意識と肉体を所有する。

【人間の所有について】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はx教系統の人間及び人間の集合を所有しない。

(2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はx教系統の人間及び人間の集合を所有することを奴隷と認識する。

(3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はx教系統の人間及び人間の集合を売買しない。

なお、彼はx教系統の人間及び人間の集合をを売買しない。例えば、株式会社は奴隷につながる可能性が高い。

【自然所有と反自然所有】

彼は次を信仰する。

(1) 自然所有は所有である、かつある主体が自然な生息地を自然に所有する。

(2) 反自然所有は所有である、かつある主体が反自然な生息地を反自然に所有する。

反自然は不自然に置き換えられる。例えば、白人がアメリカ大陸を所有することは反自然所有である。一般化すると、彼は自然な生息地を対象にかえる。

【多重所有】

彼は次を信仰する。

(1) 多重所有は所有である、かつある種の主体たちがある対象を多重に所有する。

例えば、モンゴロイド人種が彼らの自然な生息地を多重に所有する。サピエンスが地球を多重に所有する。

【比較所有】

彼は次を信仰する。

(1) 比較所有は所有である、かつそこである主体はある対象を比較的に所有する。

例えば、アメリカ先住民はアメリカ大陸を自然に所有する。東洋人や東南アジア人はアメリカ大陸を比較的に所有する。

【アメリカ大陸の所有】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは、モンゴロイド人種がアメリカ大陸を自然に多重に比較的に所有する。

アメリカ先住民がアメリカ大陸を最も強く所有する。

【反自然所有と奴隷化】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体がある対象を反自然所有するならば、その主体は自然な主体を奴隷化している。

例えば、西欧白人はモンゴロイド人種を奴隷化している。

【競技系と所有】

彼は次を信仰する。

(1) もしある競技系が存在しないならば、所有も存在しない。

競技系なしに、所有は存在しない。所有は社会的なものでもある。

【個人の所有の権利】

彼は次を信仰する。

(1) 個人による所有の権利はある競技系の中で創造主によって与えられる。

より正確には、個人によるx教系統の所有のx教系統の権利はある競技系の中で創造主によって与えられる。創造主が競技系を創造する。彼は所有と所有の主体を創造する。彼は所有の権利を信仰者に授ける。その後、信仰者は対象を所有する権利を持つ。信仰者は自己の所有行為を創造主の意志と目的に沿って自己統治する。

【所有の善悪】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の所有の善悪を正当化（断定化）する。

(2) もしある主体が所有するならば、その主体は自己の所有の善性を正当化する。

ある所有行為の善悪は儒教によって正当化される。

【統治者と所有】

彼は次を信仰する。

(1) もしある所有が悪と判断されるならば、統治者はその所有を変化させる。

(2) もしある所有が悪と判断されるならば、統治者はその所有を解除する。

もしある所有が悪と判断されるならば、統治者はその所有を変化させる、または解除する能力を持つ。

【所有に関する物語】

彼は次を信仰する。

(1) 創造主が競技系を想像して、彼は所有と所有の主体を創造した。

(2) 創造主は所有と所有の主体を信仰者に授けた。

(3) 信仰者は自己の所有を創造主の意志及び目的に沿って彼自身で統治する。

(4) もし信仰者が創造主の意志及び目的に沿って彼自身で統治しないならば、統治者がその所有を代わりに統治する。

【非物質の所有と創造主】

彼は次を信仰する。

(1) 次のxは創造主によって所有される。

(2) そのxは売買されない。

(3) そのxは父系で相続される。

創造主は創造主階級に一般化される。xには、国家や文明、言語や宗教、そしてそれらから導かれる対象が存在する。

【創造主の権限】

彼は次を信仰する。

(1) 創造主がx教系統の所有を創造する。

- (2) 創造主がx教系統の所有の主体を創造する。
- (3) 創造主がx教系統の所有及びその主体をx教徒に授ける。

儒教では、xを儒教と仮定する。

2節 儒教系統の富

【富】

彼は次を信仰する。

- (1) 富は対象である、かつある主体が所有する。

例えば、土地や車が富である。

【富の系統性】

彼は富を次のように信仰する。

- (1) x教系統の富はx教徒が所有する富である。
- (2) 儒教系統の富は儒教徒が所有する富である。

正確には、x教系統の富はx教徒がx教系統の所有で所有する対象である。儒教系統の富は儒教徒が儒教系統の所有で所有する対象である。

【富と必要と原因】

彼は富を次のように信仰する。

- (3) 儒教系統の富は儒教系統の社会形成及び社会系（システム）に必要である。
- (4) 儒教系統の富は儒教系統の社会形成及び社会系（システム）の原因でない。

例えば、水や富は富である。そして、水や富は産業に必要な対象である。しかし、それらは原因でない。原因は意志や力、人間集団や人間社会、宗教である。例えば、アメリカ先住民は広大な土地や水を身近に置いていたが、社会を作る原因を持たなかったため、彼らはその土地や水を有効に活用することができてこなかった。

【富の所属】

彼は富の所属を次のように信仰する。

- (1) もしある対象がx教系統の富であるならば、その対象はx教系統の社会に所属する。

【富の善悪】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の富の善悪を正当化（断定化）する。
- (2) もしある主体が所有するならば、その主体は自己の富の善性を正当化する。

ある富の善悪は儒教によって正当化される。

【富の性】

彼は富の性を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はx教系統の男系富をx教系統の女系富から区別する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はx教系統の男系所有をx教系統の女系所有から区別する。

xを儒教と仮定すると、もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の男系富を儒教系統の女系富から区別する。もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の男系所有を儒教系統の女系所有から区別する。なお、x教系統の男系富はx教系統の男のx教系統の富である。

【富と奴隷】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は奴隷を富と認識しない。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は奴隷を悪いと判断する。

彼は奴隷を富と認識するのは、牧畜民族の特徴であると認識する。例えば、白人は牧畜民族的であるので、西欧白人は黒人奴隷を実行した。一方、農耕民族は奴隷をそもそも取らない。彼らは彼ら自身で働くので、奴隷を必要としない。

【富の保護】

彼は富の保護を次のように信仰する。

- (1) もしある儒教徒が自己の儒教系統の社会を作るつもりがないならば、その主体の富は保障及び保護されない。
- (2) もしある儒教徒が創造主の儒教系統の意志、または目的に反するならば、その主体の富は保障及び保護されない、かつ正当に没収される。

【富の剥奪】

彼は富の剥奪を次のように信仰する。

(1) もし設計者、または設計者階級が減びるならば、x教系統の富のx教系統の所有は解除される。

上記の設計者は創造者でも良い。

【富の取り扱い】

彼は富の取り扱いを次のように信仰する。

(1) x教徒はx教系統の富をx教系統の目的及び目的力で目的的に取り扱う。

【設計者と富の所有】

彼は設計者による富の所有を次のように信仰する。

(1) 理論的には、設計者が儒教系統の全ての富を儒教系統の所有で所有する。

(2) 設計者はその富を儒教徒に貸す。

また、彼は系の所有を次のように信仰する。

(3) 設計者のみがこの儒教系（システム）を永続的に所有する。

(4) 設計者はその系を売り買いしない。

さらに、彼は使用料を次のように信仰する。

(5) 理論的には、設計者が儒教系統の富及び所有の使用料を取る。

【自然な土地の所有】

彼は自然な土地の所有を次のように認識する、または信仰する。

(1) アメリカ大陸及びその上の資源は西欧白人の富でない。

(2) アメリカ大陸及びその上の資源は比較的にならぬモンゴロイド人種の富である。

【富の具体例】

彼は富の具体例を次のように信仰する。

(1) 次のxは富である。

xには、言語と認識と善悪と判断、人間性と自己と性、富が存在する。xには、x教系統のyが存在する。

【権限】

彼は富の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の富を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の富を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の富を信仰者に授ける。

8章 法体系と契約

以下では、人間界の創造主は儒教系統の法体系を提示する。一般的に、宗教が異なると、法体系それ自体が異なる。日常的には、アメリカ合衆国の法体系はキリスト教系統の法体系である。イスラエルの法体系はユダヤ教系統の法体系である。サウジアラビア及びイランの法体系はイスラム教系統の法体系である。なお、西欧文明には、ローマ及びギリシア系統の法体系の影響及びゲルマン民族やケルト民族の侮辱的な掟の影響もある。ここでは、彼は儒教系統の法体系を提示する。

1節 儒教系統の法体系

【法】

彼は法を次のように信仰する。

- (1) x教系統の法はx教徒が信仰する法である。
- (2) 儒教系統の法は儒教徒が信仰する法である。

なお、法が何であるのかは不明である。法は決まりである、かつ法は対象の存在と状態と運動を定める。

【法の目的】

彼は法の目的を次のように信仰する。

- (1) 法の目的の一つは統治である。
- (2) 法の目的の一つは秩序形成である。
- (3) 法の目的の一つは競技系の形成である。

法の目的の一つは真理の主張でない。たとえある法体系がどんなに素晴らしいとしても、もしその法体系が対象を統治することができないならば、その法体系は目的に反する。

【法の性】

彼は法の性を次のように信仰する。

- (1) 儒教系統の性が存在する。
- (2) 儒教徒の男性系統の性と儒教徒の女性系統の性が存在する。

つまり、儒教では、彼は女性のための法と男性のための法を区別する。女性のための法は自分で形成する。

【法体系の正当性】

彼は法の正当性を次のように信仰する。

- (1) 創造主が法体系の正当性を授ける。
- (2) 法の源泉は宗教である。

創造主が法体系の善性を唯一に正当化する。儒教では、儒教系統の法体系は人間界の創造主によって正当化される。ユダヤ教では、その法体系の正当性はヤハウェによって正当化されているかもしれない。イスラム教やキリスト教も同様である。

【3種類の法】

彼は3種類の法を次のように信仰する。

- (1) 物質法は法である、かつ物質的なものの存在と状態と運動を定める。
- (2) 動物法は法である、かつ動物的なものの自由存在と自由状態と行為を定める。
- (3) 人間法は法である、かつ人間的なものの目的存在と目的状態と目的行為を定める。

物質法には、物理法則や機械に対する組式（プログラミング）が存在する。動物法には、ある種の動物に適合した法（習性や慣習、時に本能）や自由意志による法が存在する。人間法には、善悪を持つ法が存在する。

- (4) 人間法は法である、かつx教系統の善悪を持つ。
- (5) 動物法は動物的な性を持つ。

彼はx教系統の人間法をx教系統の善悪法、またはx教系統の目的法を便宜的に呼ぶ。x教系統の法の背後には、x教系統の善悪が存在する。動物的な性には、雌系統の動物法と雄系統の動物法が存在する。

【物質法の性質】

彼は物質法の性質を次のように信仰する。

- (1) 物質法はx教系統の善悪を持たない。
- (2) 物質法はxを持たない。
- (3) 物質法は動物やx教系統の人間に依存しない可能性がある。

xには、意味や認識や判断、歴史や背景、過去が存在する。物質法は無味乾燥とした機械的な決まりである。(3)に関しては、物質法は動物やx教系統の人間に依存しないので、自然法則と同様に、多くの動物やx教系統の人間と共通部分を持つ可能性がある。彼は物質法を機械法と言い換える。

【法と善悪の違い】

彼は儒教系統の法と善悪の違いを次のように信仰する。

- (1) 法は強制力を持つ。
- (2) 善悪は強制力を持たない。

より正確には、法は国家機関や何らかの社会的な機関による強制力を持つ。善悪は、ある主体がある行為をその意志及び力で主体的に実現する。

- (3) 法は善悪の現実的な実現である。
- (4) 法は善悪に関する何らかの妥協の結果である。

【法の自然性】

彼は法の自然性を次のように信仰する。

- (1) 比較的になら法と比較的になら法が存在する。
- (2) 比較的になら法は比較的になら法に優越する。

アメリカ合衆国における法体系は人種的にも宗教的にも比較的にならである。

【法と民による合意】

彼は法と民による合意を次のように信仰する。

- (1) 儒教系統の法は民による合意によって生じない
- (2) 儒教系統の法体系は創造主によって創造される。
- (3) 民はその自由意志や目的意志で儒教系統の法体系や儒教系統の競技系に参加する。
- (4) 儒教系統の法は創造主の意志や目的や認識や善悪を受け継ぐ主体にとって作成される。

サッカーの決まりはサッカー選手による合意によって生じてない。それはサッカーシステムの創造主によって創造された。そして、その意志や目的を受け継ぐ者たちが決まりを修正してきた。民ができるのは、システムに参加するかどうかの選択である。

【法体系と相続】

彼は儒教系統の法体系と相続を次のように信仰する。

- (1) 儒教徒の男性系統の法体系は父系で父から息子へと創造される。

儒教系統の法体系は相続される何かである。儒教系統の法体系は民の間の単なる契約でない。

【法と善悪】

彼は法と善悪を次のように信仰する。

- (1) 儒教系統の善悪が儒教系統の法の前に存在する。
- (2) 宗教が善悪を導き、善悪が法を導く。

言い換えると、儒教系統の法は儒教系統の善悪に基づいて作成される。法の正当性は善悪によって与えられて、善悪の正当性は創造主やその目的によって与えられる。

【合法性と違法性】

彼は合法性と善悪を次のように信仰する。

- (1) たとえある行為が違法でなかったとしても、もしその主体が自己の行為の善性を正当化することができないならば、その主体は罰される。
- (2) たとえある行為が合法であるとしても、もしその主体が自己の行為の善性を正当化することができないならば、その主体は罰される。

上記は合法だから、違法でないから、何をやっても良いと考える主体向けである。また、上記には、損害の埋め合わせも考慮される。

【法の作成者】

彼は儒教系統の法の作成者の条件を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教系統の法を形成するならば、その主体は儒教系統の善悪を正しく扱うことができる。
- (2) もしある主体が儒教系統の法を形成するならば、その主体は対象を儒教系統の認識で正しく認識する。

【法と階級】

彼は儒教系統の法と階級を次のように信仰する。

- (1) 競技者階級のための法が存在する。
- (2) 統治者階級のための法が存在する。
- (3) 創造者階級は競技系に干渉しない限り任意の法の干渉を受けない。

彼は競技者階級のための法を競技者法と呼ぶ。彼は統治者階級のための法を統治者法と呼ぶ。

【権限】

彼は法の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の（根本的な）法を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の（根本的な）法を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の（根本的な）法を信仰者に授ける。

人間界の創造主が儒教系統の法体系の基盤的な部分を創造する。

2節 儒教系統の契約

【3種類の契約】

彼は3種類の契約を次のように信仰する。

- (1) 物質契約は契約である、ある主体は別の主体と物質意志で自動的に契約する。
- (2) 動物契約は契約である、ある主体は別の主体と自由意志で非自動的に契約する。
- (3) 人間契約は契約である、ある主体は別の主体と目的意志で目的的に契約する。

物質契約は機械契約でも良い。

【物質契約】

彼は物質契約を次のように信仰する。

- (1) もしある契約が物質契約であるならば、その契約は認識を持たない。
- (2) もしある契約が物質契約であるならば、その契約は判断を持たない。

その他には、その契約には、意味や過去や歴史が存在しない。

【契約と自由意志、そして目的意志】

彼は自由意志による契約と目的意志による契約を次のように信仰する。

- (1) 目的意志による契約は自由意志による契約に優先する。
- (2) 目的意志は契約の善性を正当化する。
- (3) 自由意志は契約の善性を正当化しない。

西欧文明では、その文明民は自由意志による契約を契約の正当性と定義する。しかし、儒教では、彼は目的意志を契約の正当性を認識する。

【契約における合意】

彼は契約における合意を次のように信仰する。

- (1) 目的意志と目的力が契約における合意を形成する。
- (2) 自由意志と自由力が契約における合意を形成しない。

合意は自由でなく、目的的存在である。

【契約における目的の一致】

彼は契約における目的の一致を次のように信仰する。

- (1) もしある契約が成立するならば、両者の目的が互いに一致する。

言い換えると、ある契約における目的が互いに一致する時、その契約は成立する可能性がある。

【契約における認識と判断】

彼は契約における認識と判断を次のように信仰する。

- (1) もしある契約が存在するならば、契約に関する共通認識が存在する。
- (2) もしある契約が存在するならば、契約に関する共通判断が存在する。

例えば、日本国がアメリカ合衆国が契約を結ぶ時、アメリカ大陸の多様性に関する善悪の判断や西欧白人がアメリカ大陸で統治者を担っていることを認識を形成する。認識や判断なき契約は機械的なものであり、動物的でも人間的でもない。

- (3) もしある契約が存在するならば、契約に関する認識が共有される。
- (4) もしある契約が存在するならば、契約に関する判断が共有される。

上記では、互いの認識や判断が共有される。ただし、その認識や判断が一致している必要はない。

【認識及び判断の契約性】

彼は認識及び判断の契約性を次のように信仰する。

- (1) 認識は契約の前段階である。
- (2) 判断は契約の前段階である。

認識や判断は何らかのつながりである。ただし、実際の契約のように、強制力はない。しかし、日常的には、人々はこの認識や判断に沿って契約や約束を結ぶ。

- (3) もしある契約が存在するならば、認識が存在する。
- (4) もしある契約が存在するならば、判断が存在する。

【一般化された契約】

彼は一般化された契約を次のように信仰する。

- (1) ある主体と別の主体はある競技系に目的意志で所属する。

彼は上記を一般化された契約を信仰する。ある主体と別の主体はあるシステムを彼ら自身で作成して、彼らの目的意志でそのシステムに所属する。この時、彼らはそのシステムにおける決まり、つまり法に沿って主体的に運動する。

【認めさせることの無駄】

彼は認めさせることの無駄を次のように認識する。

- (1) 何かを認めさせることは時間と富の無駄である。
- (2) もしある主体aが何かを認めないならば、別の主体bは他者との共通認識や共通判断（共通網）を外部から形成する。

なぜなら、人々は絶対に認めない。彼らは非常に抵抗する。例えば、彼女らは白人との中間種の子供を見せびらかしたくて、白人と結婚したことを死ぬまで認めない。認めさせようとする、彼女らは非常に混乱して、取り乱す。なお、認めさせることは合意させることである。この場合、ある主体は「俺はそうのように認識する。」と表現すれば十分である。そして、その主体はその認識を共通する。

【信用と信頼】

彼は契約における信用と信頼を次のように信仰する。

- (1) もしある契約が存在するならば、信用が存在する。
- (2) もしある契約が存在するならば、信頼が存在する。

信用はある主体がある行為を現在から未来へと実現するかである。信頼はある主体がある行為を実現してきたかである。契約には、信用と信頼の両方が必要である。

9章 死生観

以下では、人間界の創造主は儒教系統の死生観を創造する。一般的に、宗教が異なると、死生観が異なる。例えば、アブラハムの宗教では、天国や地獄の存在が仮定されている。その存在に基づいて、キリスト教系統の社会は安楽死や尊厳死、医療に関して設計されている。ここでは、彼は儒教系統の死生観を提示する。彼はそれを応用して、安楽死や尊厳死、医療を設計する。

1節 儒教系統の死生観

【死生観】

彼は次を信仰する。

- (1) x教系統の死生観はx教徒が信仰する死生観である。
- (2) 儒教系統の死生観は儒教徒が信仰する死生観である。

【死生観と性】

彼は次を信仰する。

- (1) x教系統の母系死生観が存在する。
- (2) x教系統の父系死生観が存在する。

彼は儒教系統の生と儒教系統の死を次のように信仰する。

【儒教系統の生】

彼は次を信仰する。

- (1) ある主体が活着しているとは、その主体の肉体と意識（感覚）と主体（中の人）の組みが存在することである。
- (2) ある主体がx教系統の人間として活着しているとは、彼が競技系の中で競技していることである。

上記の活着しているは完全に活着している、覚醒的に活着しているであるかもしれない。場合により、彼は競技を所属すると置き換える。

【儒教系統の眠り】

彼は次を信仰する。

- (1) ある主体が眠っているとは、その主体の肉体のみが存在することである。

上記には、睡眠や気絶、麻酔による眠り、昏睡や植物状態が存在する。上記の眠りは非覚醒的な状態であるかもしれない。

【儒教系統の死】

彼は次を信仰する。

- (1) ある主体が死ぬとは、その儒教徒の肉体が死ぬことである。
- (2) ある主体がx教系統の人間として死ぬとは、彼がx競技系から退場することである。

なお、(1) に関して、次の次の思考規範が仮定される。

- (3) もしある主体の肉体が死ぬならば、その主体の意識（感覚）と主体（中の人）も死ぬ。

上記は経験的、または感覚的である。また、もし主体がそれのみで存在するならば、たとえ別の主体がある主体の肉体を破壊するとしても、その行為は殺人行為にならない可能性がある。それを防止するためにも、肉体の死と主体の死を連動させる。

【生及び死における個と集団】

彼は次を信仰する。

- (1) 個人的な死と集団的な死が存在する。
- (2) 個人的な生と集団的な生が存在する。

例えば、個人的な死では、もしある主体が死ぬならば、その視点からの世界は亡くなるだろう。なぜなら、何かを把握する主体が存在しない。その主体の視点は地球上には存在しない。しかし、集団的な死では、たとえある主体が死ぬとしても、その主体はその視点を地球上に置くだろう。そして、その主体は死後における遺体の収容や家族について考える。一般的に、テロリストは集団的な死を考えないので、後先考えずに、自爆テロを実行する。

彼は儒教系統の生と死を次のように信仰する。

- (3) 儒教系統の人間の死は個人的な（儒教系統の）死と集団な（儒教系統の）死の組みである。
- (4) 儒教系統の人間の生は個人的な（儒教系統の）生と集団な（儒教系統の）生の組みである。

彼は生と死を個人と集団の二重性と信仰する。彼は儒教系統をx教系統へと一般化する。

【死における無】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が死ぬならば、その主体は個人的な死として無になる。

(2) もしある主体が死ぬならば、その主体は集団的な死として無にならない。

上記はおそらくである。だから、もしある主体が死ぬならば、その主体は個人的な死としておそらく無になるだろう。例えば、その主体は残された家族について考えるだろう。

【死後の世界】

彼は次を信仰する。

(1) もし死後の世界が存在するならば、死後の世界はある主体がその死後について想像する競技系である。

ただし、死後の世界の存在は仮定されない。例えば、ある主体が死ぬとき、その主体は残された家族の世界を想像する。それが死後の世界である。より正確には、ある主体が死ぬと、その主体が世界を把握する主体を失うので、その主体の視点は地球には存在しない。しかし、人々は視点を地球上に引き続けて、残された家族の未来について考えてきた。ここでは、彼はその世界を死後の世界と仮定する。

【生の永続性】

彼は生の永続性を次のように信仰する。

(1) もしある儒教徒がその子孫を残すならば、儒教系は永続的である。

(2) もしある儒教徒がその子孫を残すならば、東洋文明系は永続的である。

(3) もしある主体が儒教徒であるならば、集団としての永続性を上記の(1)と(2)で信仰する。

日常的には、個人の生は永遠でない。しかし、ある主体が競技系を設計するとき、その主体は何らかの永続性を提示する必要がある。そこで、彼は競技系の永続性や集団としての永続性を提示する。

【生と死の善悪】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の生を善と判断する。

(2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の死を悪と判断する。

(3) 人間界の創造主が儒教系統の生の善性を正当化する。

または、もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の死を善と判断しない。より正確な(3)は次である。もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは、人間界の創造主が儒教系統の生の善性を正当化する。

【病気】

彼は病気を次のように決める。なお、下記は宗教的な意味での病気である。

- (1) 病気は自然現象である、かつそれは儒教系統の生の善性を否定する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は病気を悪いと判断する。

上記の現象は存在や状態を含む。また、上記に現象は骨折などを含む。日常的には、病気は生を破壊したり、阻害する現象である。上記の自然現象は基本的には自動的である。しかし、非自動的な可能性もあるように感じる。そこで、彼は機械現象でなく、自然現象とした。または、もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は病気を善と判断しない。

【治療】

彼は治療を次のように決める。なお、下記は宗教的な意味での治療である。

- (1) 治療は行為である、そこである主体は病気によって否定された生の善性を回復する。

治療は行為である、そこである主体は病気によって否定された生の善性をもと通りにする。

【健康】

彼は健康を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は健康を善と判断する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は不健康を悪いと判断する。

彼は不健康を生善性を破壊する可能性がある状態と認識する。

【医療に関する思考規範】

彼は次を決める。

- (1) もしある主体が自己の生の善性を正当化しないならば、その主体は医療を受ける権利を持つ。

または、もしある主体が自己の生の善性を正当化しないならば、その主体は治療される必要がない。もしある主体が医療を受けたいならば、その主体は自己の善性を正当化する必要がある。そして、その主体は自己の善性を否定する病気を悪いと判断する必要がある。この時、その主体は医療を受ける権利を持つ。

【自殺】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自殺を善と判断しない。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自殺を悪いと判断しない。

ただし、ある主体が自己の生を善と判断しないという条件が存在する。この時、自殺は悪いと必ずしも判断されない。彼は安楽死と尊厳死をここから導く。

【安楽死及び尊厳死の系統性】

彼は次を信仰する。

- (1) x教系統の安楽死はx教徒が信仰する安楽死である。
- (2) x教系統のy死はx教徒が信仰するy死である。

例えば、儒教系統の安楽死は儒教徒が信仰する安楽死である。なお、自殺をx死に含める。x教系統の自殺はx教徒が信仰する自殺である。

【生きているように見えるもの】

彼は次を認識する。

- (1) 次のxは生きているように見える。

xには、植物、微生物、サピエンスを含む動物が存在する。ウイルスは機械的に見える。

【権限】

彼は死生観の設計や創造に関する権限を次のように認識する、かつ決定する。

- (1) 設計者のみがx教系統の死生観を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の死生観を決定する。
- (3) 設計者のみがx教系統の死生観を信仰者に授ける。

10章 自己認識（アイデンティティ）

以下では、人間界の創造主は儒教系統の自己認識を創造する。一般的に、人種や宗教や文明や階級が異なる時、自己認識（アイデンティティ）も異なる。例えば、西洋文明では、ユダヤ教徒の白人がユダヤ教徒でなく、ユダヤ人になる。アメリカ国民やフランス国民がアメリカ人やフランス人のようになる。

一般的に、西欧文明では、白人は人工的な自己と生物的な自己を区別することができないように見える。また、アメリカ合衆国では、黒人や有色人という自己認識が存在する。そこでは、肌の色が黒人という人種になったり、自己認識に密接に関係する。この自己認識もまた極めて独特である。

さらに、生活形態が異なると、自己認識もまた異なるように思える。例えば、遊牧民は独特な自己認識を持ち、彼らは父系を特に重視する。そこでは、トルコ人とモンゴル人がチュルク系として同じ括りとされる。その他にも、自己認識は過去や先祖を重視するか、アメリカ大陸に関する土地の先住権、人種的な背乗りや民族的な背乗りと密接に関係してくる。そして、どの自己認識が正しいのかという問題が存在する。

政治的な分野では、自己の系統の自己認識を持たないと、非自己によって自己を決定されて、戦争や争いの道具にされる。代表的な例では、西欧白人によって決定されたツチ族やフツ族の例が存在する。ロシアとウクライナ戦争でも、下位分類としての部族は異なるが、実質的には同じスラブ民族同士が争っている。日常的な例では、大和民族は自己の自己認識を持たず、自己の人種や民族を白人と感じているので、彼らは人種的に侮辱されても、彼らは動物のように傍観している。以下では、彼は儒教系統の自己を提示する。

1節 儒教系統の自己認識

【自己認識の系統性】

彼は次を決める。彼は次の（3）と（4）を信仰する。

- （1）x教系統の自己認識はx教徒が信仰する自己認識である。
- （2）儒教系統の自己認識は儒教徒が信仰する自己認識である。

儒教徒の自己認識はユダヤ教徒の自己認識と異なる。例えば、有色人はユダヤ教徒の白人をユダヤ人と認識しない。

（3）もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己や非自己を儒教系統の認識で自己認識する。

（4）もしある主体が自己や非自己を儒教系統の認識で自己認識するならば、その主体は東洋文明に所属する。

儒教系統の認識は東洋文明に所属する。

【自己認識の性】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はx教の男性系統の自己認識をx教の女性系統の自己認識から区別する。

x教の女性系統の自己認識が存在するのかは不明である。もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教の男性系統の自己認識を儒教の女性系統の自己認識から区別する。

【自己認識に関する主導権】

彼は次を信仰する。

(1) 自己認識主導権は権利である、かつx教徒は自己及び非自己をx教系統の認識で自己認識する。

上記の権利は力や能力であるかもしれない。xを儒教徒とすると、儒教系統の自己認識主導権は権利である、かつ儒教徒は自己及び非自己を儒教系統の認識で自己認識する。そこでは、例えば、儒教徒はユダヤ教徒の白人をユダヤ人でなく、ユダヤ教徒と認識する。

(2) もし儒教徒が儒教系統の自己認識を奪われるならば、その儒教徒はその行為を儒教系統の人間性の強奪と認識する。

(3) もし儒教徒が非自己系統の自己認識を強制されるならば、その儒教徒はその行為を認識の奴隷化と認識する。

(4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の自己認識を維持する。

【自己認識の善性の正当化】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が自己の社会を形成することができないならば、その主体系統の自己認識の善性は正当化されない。

(2) もしある主体が他者、特に異人種や異民族や異教徒や異文明民と対峙することができないならば、その主体系統の自己認識の善性は正当化されない。

(3) もしある系統の自己認識が任意の文明に所属しないならば、その自己認識の善性は正当化されない。

(4) もしある系統の自己認識が任意の地域に所属しないならば、その自己認識の善性は正当化されない。

彼は(1)を社会形成性と呼ぶ。彼は(2)を対峙性と呼ぶ。彼は(3)を所属性、または文明所

属性と呼ぶ。彼は（4）を地域性と呼ぶ。ここでの地域は東洋地域やアジア地域である。東洋地域はアジア地域の部分である。

例えば、アメリカ合衆国では、アメリカ国民は個人の自己認識を自由に決定している。しかし、この自己認識には、社会形成性が存在しない。対峙性に関しては、西欧白人との中間種は自己を大和民族と装う。しかし、彼らはその自己認識で漢民族と対峙できない。さらに、その自己認識は東洋文明にもアジア地域にも所属しない。

【自己認識と所属】

彼は次を信仰する。

- （1）もしある主体が儒教系統の自己認識を持つならば、その主体は東洋文明に所属する。
- （2）もしある主体が仏教系統の自己認識を持つならば、その主体は東洋文明に所属する。
- （3）もしある主体がキリスト系統の自己認識を持つならば、その主体は東洋文明に所属しない。

特に、西洋キリスト教系統の自己認識は東洋文明に所属しない。その他には、ユダヤ教やキリスト教、ヒンドゥー教系統の自己認識は東洋文明に所属しない。仏教に関しては、儒教系統の自己認識はより強く東洋文明に所属する。

【科学との兼ね合い】

彼は次を信仰する。

- （1）もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は儒教系統の自己認識を自然界に関する正確な表現に優先させる。
- （2）もしある主体が儒教徒であるならば、分析者がより強力な儒教系統の社会を形成しない限り、その主体は儒教系統の自己認識を自然界に関する正確な表現に優先させる。

上記の分析者は科学者である。例えば、黒人という人種は存在しない。しかし、白人はネグロイド人種を黒人と呼んで、加害してきた。だから、彼らは自己を黒人と感じるの科学的でないが、自然である。この時、もし彼が黒人であったならば、たとえ黒人が科学的に存在しなかったとしても、彼は黒人という存在を認識して政治活動や社会活動を優先させる。

現在では、西洋文明における遺伝学や考古学は東洋文明を圧倒している。しかし、彼らは現実的には黒人という人種を社会に組み込んで、活動している。彼らは黒人という人種をネグロイド人種というより自然な人種にするような社会を形成することができていない。この時、黒人という自己認識や人種はネグロイド人種という自己認識や人種に優先される。もしそれが嫌であるならば、科学者はより強力な社会を形成する必要がある。

アメリカ先住民の場合、西欧白人はアメリカ先住民をモンゴロイド人種と一度分類した。だから、モンゴロイド人種はその応答に沿って自己認識を形成する。彼は認識を一種の契約や約束と

認識する。現在、アメリカ先住民は北ユーラシア人の遺伝子を持っていると速報されている。その北ユーラシア人には、コーカサス人種の母系や遺伝子が存在する。西欧白人はこの遺伝的な事実を使用して、アメリカ先住民をコーカサス人種に含め、アメリカ大陸の比較的な先住権を訴えようとするかもしれない。しかし、彼は西欧白人はアメリカ先住民と一度認識したので、彼はその認識に従い、新たな知見を強制されることを悪いと判断する。

【権限】

彼は次を信仰する

- (1) 創造者のみがx教系統の自己認識を創造する。
- (2) 設計者のみがx教系統の自己認識を設計する。

彼は設計と創造の違いを認識していない。つまり、創造主のみがx教系統の自己認識を創造することができる。儒教の場合、人間界の創造主のみが儒教系統の自己認識を創造することができる。

2節 自己認識の形成に関する儒教系統の手法

【遺伝的な距離と位置】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己をある主体aと別の主体bとの遺伝的な距離で認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己を遺伝的な位置で認識する。

例えば、日本人と漢人は日本人と欧州人との中間種よりも遺伝的に近い。その中間種はカザフスタン人を含む中央アジア人に遺伝的に近い。

- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は場合により理想個体を置く。

彼は交雑してない純粋な個体を仮想的に置く。その後、彼はある個体をその理想個体からの遺伝的な距離で認識する。

【離散と連続】

彼は次を信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己を0か1で認識しない。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己を日常的な意味で連続的に認識する。

例えば、ある主体が日本人であるか、または日本人でない。この文は0と1である。彼はある日本人が別の主体にどの程度遺伝的に近いのかを認識する。

【大局性】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己を大局から局所へと認識する。

例えば、彼は自己をモンゴロイド人種と認識する。次に、彼は自己を東洋小種と認識する。次に、彼は自己を大和民族と認識する。このように、彼は自己を大局から局所へと縮小するように認識する。逆の場合、彼は自己をアイルランド部族と認識する。次に、彼は自己を欧州小人種と認識する。彼は自己をコーカサス人種と認識する。

【自然と人工の区別】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自然な自己認識と人工的な自己認識を区別する。

(2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自然な自己認識における集合の要素名を～人と呼ぶ。

例えば、自然な自己認識には、人種や民族や部族が存在する。性も自然な自己認識である。人工的な自己認識には、教徒や話者や国民が存在する。ここでの国民は国民国家における要素である。

(3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は宗教に関する集合の要素名を～教徒と呼ぶ。

(4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は国民国家に関する集合の要素名を～国民と呼ぶ。

(5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はある言語を話す集団に関する集合の要素名を～話者と呼ぶ。

ユダヤ教を信仰する人はユダヤ人でなく、ユダヤ教徒である。日本国籍の所有者は日本人でなく、日本国民である。英語を話す人間は英語話者である。

【自然な自己認識】

彼は次を信仰する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は認識するのは（信仰するのは）」を省略する。

(1) 自然な自己認識は自己認識である、かつそれは次の条件を満足する。

(2) 過去から現在への遺伝的な分岐の結果が自然な自己認識を自然に形成する。

(3) 過去から現在への文化的、歴史的、宗教的、文明的な分岐の結果が人工に関する自然な自己認識を形成する。

(4) もし自然な自己認識が形成されるならば、(2)と(3)は自己認識の形成に必要である。

(5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は自己の自己認識を自然な自己認識で形成する。

例えば、大和民族という民族は大陸東洋人から遺伝的に文化的に隔離されて形成された。その民族は混合の結果でない。一方、国民国家のような自己認識は自然でなく、人工的な自己認識である。一般的に、白人は彼ら自身の自己認識を現在から未来へと向かっていくように形成する。白人にとって、自己認識は人工的に作る何かであり、主義や主張の類であるように見える。儒教では、自己認識は自然なものであり、すでに存在する何かを宗教に沿って認識するだけである。白人の自己認識は人工的、原因的であり、東洋人や儒教徒の自己認識は自然であり、必要的である。

【人工的な自己認識】

彼は次を信仰する。

(1) 現在から未来への契約や意志が人工的な自己認識を人工的に形成する。

(2) 人工的な自己認識の原因はその契約や意志である。

(3) 人工的な自己認識には、過去が存在しない。

(4) 人工的な自己認識には、必要が存在しない。

(5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその自然な自己認識を人工的な自己認識で形成しない。

例えば、会社や選手団、国民国家における国民、ある種の宗教団体が人工的な自己認識を持つ。

【集合と要素】

彼は集合と要素を次のように決める。

(1) モンゴロイド人種や大和民族は集合名である。

(2) 日本人や東洋人は集合の要素名である。

日本人 \in 大和民族。モンゴロイド人 \in モンゴロイド人種。集合同士の関係はモンゴロイド人種 \supset 大和民族。

【種の含有関係】

彼は種の含有関係を次のように表示する。

(1) ... \supset 亜人種 \supset 人種 \supset 小種 \supset 民族 \supset 部族 \supset ... \supset 個族

- (2) ... \supset サピエンス亜人種 \supset モンゴロイド人種 \supset 東洋小種 \supset 大和民族 \supset 東北部族 \supset ... \supset 荒谷族
(3) ... \supset サピエンス人 \supset モンゴロイド人 \supset 東洋人 \supset 日本人 \supset 東北人 \supset ... \supset 荒谷卓

彼は要素名を亜人、人、小人、民人、部人と便宜的に決定する。基本的には、彼は～人と呼ぶ。

【思考規範】

彼は儒教系統の自己認識に関する思考規範を次のように信仰する。

- (1) もしある主体が日本人であるならば、その主体は東洋人である。
(2) もしある主体が東洋人であるならば、その主体はモンゴロイド人である。

組み合わせると、もしある主体が日本人であるならば、その主体はモンゴロイド人である。(1)と(2)の対偶をそれぞれ取ると、もしある主体が東洋人でないならば、その主体は日本人でない。もしある主体がモンゴロイド人でないならば、その主体は東洋人でない。

3節 儒教系統の分類

【人種】

彼は人種を儒教系統の認識で次のように認識する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは」を省略する。

- (1) 人種は数万年以上の遺伝的な分岐である。
(2) 人種はサピエンスという種の下位分類である。

場合により、彼は下位分類を部分と置き換える。人種 \subset 生物種。人種は生物種の部分集合である。その生物種がヒト科やヒト属であるのかは不明であるが、生物学を応用する。彼の認識では、3万年から5万年の遺伝的な隔離は人種の形成に十分であるように思える。

【人種の分類】

彼は人種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はモンゴロイド人種を認識する。
(2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はコーカサス人種を認識する。
(3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はオーストラロイド人種を認識する。
(4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はネグロイド人種を認識する。

彼は次の補足を提示する。

- (5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、オーストラロイド人種は南

インド人種とオセアニア人種に分類されるかもしれない。

(6) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、コイサンやピグミーはコイサン人種やピグミー人種に分類されるかもしれない。

南インド人種は南インド人である。彼らはY染色体ハプログループHを持っている。オセアニア人種はアボリジニやメラネシア人である。彼らはY染色体ハプログループCやMSを持っているように思える。コイサンやピグミーも核ゲノムでも父系でも特殊である可能性がある。彼らはY染色体ハプログループAとB系統を持っている。

【亜人種】

彼は亜人種を儒教系統の認識で次のように認識する。場合により、彼は亜人種を大人種と置き換える。場合により、彼は旧人類を大人類と置き換える。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは」を省略する。

- (1) 亜人種は遺伝的な分岐である。
- (2) 亜人種はサピエンスという種の上位分類である。
- (3) 亜人種は旧人類の下位分類である。

人種 \subset 亜人種 \subset 生物種。亜人種には、ネアンデルタールやデニソワが存在する。

【亜人種の分類】

彼は亜人種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はサピエンス亜人種を認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はネアンデルタール亜人種を認識する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はデニソワ亜人種を認識する。
- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は未知のサブサハラ亜人種を認識する。

【小種】

彼は小種を儒教系統の認識で次のように認識する。場合により、彼は小種を小人種と言い換える。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは」を省略する。

- (1) 小種は数千年以上から数万年の遺伝的な分岐である。
- (2) 小種は人種という種の下位分類である。

場合により、彼は下位分類を部分と置き換える。

【小種の分類】

彼はモンゴロイド小種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は東洋小種を認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は東南アジア小種を認識する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はアメリカ小種を認識する。

彼はコーカサス小種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は欧州小種を認識する。
- (5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は地中海小種を認識する。
- (6) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は中東小種を認識する。

彼はネグロイド小種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は東アフリカ小種を認識する。
- (5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は西アフリカ小種を認識する。
- (6) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は中南部小種を認識する。

彼はオーストラロイド小種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (7) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はアボリジニ小種を認識する。
- (8) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はニューギニア小種を認識する。
- (9) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は南インド小種を認識する。

ただし、彼は南インド人とニューギニアが同じ種類であるのかを疑う。

【民族】

彼は民族を儒教系統の認識で次のように認識する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは」を省略する。

- (1) 民族は千年以上の遺伝的な分岐である。
- (2) 民族は小種の下位分類である。
- (3) 場合により、自然な認識が含まれる。

例えば、神話による民族の分類が(3)に該当する。

【民族の分類】

彼は東洋小種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は漢民族を認識する。
- (2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は華北民族を認識する。
- (3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は華南民族を認識する。

- (4) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は大和民族を認識する。
- (5) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はチベット民族を認識する。
- (6) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は朝鮮民族を認識する。
- (7) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はモンゴル民族を認識する。
- (8) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はの他を認識する。

その他には、イヌイット民族やシベリアにおけるケット民族やY染色体ハプログループN系統の民族が存在する。しかし、イヌイット民族は遺伝的にはモンゴル民族に吸収されるようにも感じる。または、彼らはシベリア民族を認識して、ケット人やN系統の東アジア人をその中に所属すると認識する。

彼は欧州小種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (9) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はケルト民族を認識する。
- (10) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はゲルマン民族を認識する。
- (11) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は西スラブ民族を認識する。
- (12) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は東スラブ民族を認識する。
- (13) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はの他を認識する。

場合により、彼はケルト民族をフランス人とイギリス人にさらに分類する。その他には、フィンランド人が存在する。しかし、核ゲノムでは、彼らは北欧人に遺伝的に近い可能性がある。

彼は地中海小種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (14) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はイベリア民族を認識する。
- (15) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はイタリア民族を認識する。
- (16) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はバルカン民族を認識する。
- (17) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はアナトリア民族を認識する。
- (18) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はの他を認識する。

彼はギリシア人をバルカン民族かアナトリア民族のどちらかに便宜的に含める。

彼は中東小種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。

- (18) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は北アフリカ民族を認識する。
- (19) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はエジプト民族を認識する。
- (20) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はアラブ民族を認識する。
- (21) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はイラン民族を認識する。
- (22) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はの他を認識する。

その他には、パキスタン民族や北インド民族が存在する。

彼は東南アジア小種の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。ただし、彼は彼らをうまく

認識していない。

- (23) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はビルマ民族を認識する。
- (24) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はフィリピン民族を認識する。
- (25) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はタイ民族を認識する。
- (26) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は北民族を認識する。
- (27) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は南民族を認識する。
- (28) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はマレー民族を認識する。
- (29) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体はその他を認識する。

彼はベトナム人とラオス人を北民族と便宜的に認識する。彼は南ベトナム人とカンボジア人を南民族と認識する。ただし、彼は彼自身の認識を正しい認識と認識しない。また、彼はマレーシア人とインドネシア人をうまく認識することができない。マレー民族を分類すると、彼はマレーシア民族とインドネシア民族に分類する。さらに、インドネシア民族を分類すると、島ごとに分類する。

【部族】

彼は部族を儒教系統の認識で次のように認識する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは」を省略する。

- (1) 部族は百年以上の遺伝的な分岐である。
- (2) 部族は民族の下位分類である。

【部族の分類】

彼は大和民族の分類を儒教系統の認識で次のように認識する。ただし、彼は彼らをうまく認識していない。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体xを認識する」を省略する。

- (1) 東北部族
- (2) 関東部族
- (3) 中部部族
- (4) 関西部族
- (5) 四国部族
- (6) 中国部族
- (7) 九州部族
- (8) 沖縄部族
- (9) その他

その他には、北陸部族が存在する。また、沖縄部族を古モンゴロイド人種の縄文民族の部分とする認識も可能である。

【コーカサス人種の分類】

彼はコーカサス人種を異なる方法で分類する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は欧州小人種と地中海小人種と中東小人種を認識する。

(2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は欧州及び西地中海小人種と中東小人種と北アフリカ小人種に分類される。

(3) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は欧州小人種と地中海小人種と中東小人種と北アフリカ小人種を認識する。

場合(2)では、R系統の欧州及び西地中海小人種とJ系統の中東小人種とE系統の北アフリカ系統に分類される。J系統の中東小人種は、さらに、アナトリア及びイランとメソポタミア及びアラビア半島に分類される。場合(3)では、欧州系統とイベリアからアナトリア、コーカサスまでの地中海系統とメソポタミア及びアラビア、そしてイランまでの中東系統、そして北アフリカ系統が存在する。

【コーカサス人種の父系】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は認識するのは、現代におけるコーカサス人種の父系はR系統、I系統、G系統、J系統、E1b1b系統である。

(2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は認識するのは、現代における欧州人は東部狩猟採集民と西部狩猟採集民、初期欧州農耕民とコーカサス狩猟採集民の遺伝子を持っている。

東部狩猟採集民の父系はR系統である。西部狩猟採集民の父系はI系統である。初期欧州農耕民の父系はG系統である可能性がある。コーカサス狩猟採集民はJ系統である可能性がある。ただ、R系統がもともとコーカサス人種の父系であったのかは現時点では断定されていないように思える。

4節 混血に関する儒教系統の分類

【分岐人種】

彼は分岐人種を次のように認識する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は認識するのは」を省略する。

(1) 分岐人種は遺伝的に強く分岐したサピエンスである。

(2) 分岐は比較的である。

(3) 彼は比較的に分岐した個体を比較的分岐人種と呼ぶ。

なお、彼は分岐人種を分岐種とも呼ぶ。モンゴロイド人種はコーカサス人種とモンゴロイド人種

の混血、つまり中間種と比較すると、それは分岐種である。1/4コーカサス人種及び3/4モンゴロイド人種はその中間種と比較すると、それは分岐種である。しかし、それをモンゴロイド人種と比較すると、それは分岐種でない。いわゆる四分の1のサピエンスである。

【中間人種】

彼は中間人種を次のように認識する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) 中間人種はa人種とb人種の1対1の混血である。
- (2) 父系中間人種と母系中間人種が存在する。
- (3) 中間人種は人種でない。

彼は中間人種を中間種とも呼ぶ。

【中間人種の名称】

彼は中間人種の名称を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) 中間人種の名前は2つの人種の頭文字によって与えられる。
- (2) 頭文字の順序は父、そして母である。
- (3) 性に無関係な名前は父と母の中間人種名と母と父の中間人種名を並べる。

彼はいくつかの具体例を提示する。

- (4) 父コーカサス人種と母モンゴロイド人種→コモ中間人種
- (4') 父モンゴロイド人種と母コーカサス人種→モコ中間人種

性に無関係な名前はコモモコ中間人種である。略称はコモモコやコモコである。

- (5) 父ネグロイド人種と母モンゴロイド人種→ネモ中間人種
- (5') 父モンゴロイド人種と母ネグロイド人種→モネ中間人種

性に無関係な名前はネモモネ中間人種である。略称はネモモネやネモネである。

- (6) 父コーカサス人種と母ネグロイド人種→コネ中間人種
- (6') 父ネグロイド人種と母コーカサス人種→ネコ中間人種

性に無関係な名前はコネネコ中間人種である。略称はコネコである。

【繰り上げ法】

彼は繰り上げ法を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) もしa民族とb人種が交雑するならば、その子孫はa民族のa人種とb人種の間種である。
- (2) もし下位分類の集合aと上位分類の集合bが交雑するならば、その子孫は上位分類の集合aとその集合bの間種である。

上記は大局性と遺伝的な距離に依存する。例えば、もし大和民族の母とコーカサス人種の父が交雑するならば、その子孫は大和民族のモンゴロイド人種とコーカサス人種のコモ間種である。

【中間小種】

彼は中間小種の名称を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) 中間小種はa小種とb小種の1対1の混血である。
- (2) 父系中間小種と母系中間小種が存在する。
- (3) 中間小種は小種でない。

【中間小種の名称】

彼は中間小種の名称を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) 中間小種の名前は2つの小種の頭文字によって与えられる。
- (2) 頭文字の順序は父、そして母である。
- (3) 性に無関係な名前は父と母の中間小種名と母と父の中間小種名を並べる。

彼はいくつかの具体例を提示する。

- (4) 父東洋小種と母東南アジア小種→トナ中間小種
- (4') 父東南アジア小種と母東洋小種→ナト中間小種

頭文字が重複するならば、重複しない初めの文字を選択する。性に無関係な名前はトナナト中間小種である。略称はトナナトやトナトである。

- (5) 父アメリカ小種と母東南アジア小種→アナ中間小種
- (5') 父東南アジア小種と母アメリカ小種→ナア中間小種

性に無関係な名前はアナナア中間小種である。略称はアナナアやアナアである。

- (6) 父東洋小種と母アメリカ小種→トア中間小種

(6') 父アメリカ小種と母東洋小種→アト中間小種

性に無関係な名前はトアアト中間小種である。略称はトアアトやトアトである。

【繰り上げ法】

彼は繰り上げ法を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) もしa民族とb小種が交雑するならば、その子孫はa民族のa小種とb小種の間小種である。
- (2) もし下位分類の集合aと上位分類の集合bが交雑するならば、その子孫は上位分類の集合aとその集合bの間小種である。

上記は大局性と遺伝的な距離に依存する。例えば、もし大和民族の母と東南アジア小種の父が交雑するならば、その子孫は大和民族の東洋小種と東南アジア小種のトナ中間小種である。

【中間民族】

彼は中間民族の名称を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) 中間民族はa民族とb民族の1対1の混血である。
- (2) 父系中間民族と母系中間民族が存在する。
- (3) 中間民族は民族でない。

【中間民族の名称】

彼は中間民族の名称を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) 中間民族の名前は2つの民族の頭文字によって与えられる。
- (2) 頭文字の順序は父、そして母である。
- (3) 性に無関係な名前は父と母の中間民族名と母と父の中間民族名を並べる。

彼はいくつかの具体例を提示する。

- (4) 父大和民族と母朝鮮民族→ヤチ中間民族
- (4') 父東朝鮮民族と母大和民族→チヤ中間民族

性に無関係な名前はヤチチヤ中間民族である。略称はヤチチヤやヤチヤである。

- (5) 父漢民族と母朝鮮民族→カチ中間民族
- (5') 父朝鮮民族と母漢民族→チカ中間民族

性に無関係な名前はカチチカ中間民族である。略称はカチチカやカチカである。

- (6) 父大和民族と母漢民族→ヤカ中間民族
- (6') 父漢民族と母大和民族→カヤ中間民族

性に無関係な名前はヤカカヤ中間民族である。略称はヤカカヤやヤカヤである。他の民族も同様である。

【繰り上げ法】

彼は繰り上げ法を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) もしa部族とb民族が交雑するならば、その子孫はa部族のa民族とb民族の中間民族である。
- (2) もし下位分類の集合aと上位分類の集合bが交雑するならば、その子孫は上位分類の集合aとその集合bの中間民族である。

上記は大局性と遺伝的な距離に依存する。例えば、もし朝鮮民族の母と東北部族の父が交雑するならば、その子孫は大和民族と東北部族の大和民族のヤチ中間民族である。

【中間部族】

彼は中間部族の名称を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) 中間部族はa部族とb部族の1対1の混血である。
- (2) 父系中間部族と母系中間部族が存在する。
- (3) 中間部族は部族でない。

【中間部族の名称】

彼は中間部族の名称を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) 中間部族の名前は2つの部族の頭文字によって与えられる。
- (2) 頭文字の順序は父、そして母である。
- (3) 性に無関係な名前は父と母の中間部族名と母と父の中間部族名を並べる。

彼はいくつかの具体例を提示する。

- (4) 父関東部族と母東北部族→カト中間部族
- (4') 父東北部族と母関東部族→トカ中間部族

頭文字が重複するならば、重複しない初めの文字を選択する。性に無関係な名前はカトトカ中間小種である。略称はカトトカやカトカである。

- (5) 父関西部族と母東北部族→サト中間部族
- (5') 父東北部族と母関西部族→トサ中間部族

性に無関係な名前はサトトサ中間部族である。略称はサトトサやサトサである。

- (6) 父関東部族と母関西部族→カサ中間部族
- (6') 関西部族と母関東部族→サカ中間部族

性に無関係な名前はカササカ中間部族である。略称はカササカやカサカである。

【中間亜人種】

彼は中間亜人種の名称を次のように決定する。彼は「もしある主体が儒教徒であるならば、その主体は信仰するのは」を省略する。

- (1) 中間亜人種はa亜人種とb亜人種の1対1の混血である。
- (2) 父系中間亜人種と母系中間亜人種が存在する。
- (3) 中間亜人種は亜人種でない。

ただし、亜人種が本当に存在したのかは研究の進展に依存する。亜人種が実際に発掘された後、名称が彼らに与えられる。

5節 アメリカ先住民について

以下では、彼はアメリカ先住民に対する彼の認識を提示する。アメリカ先住民はモンゴロイド人種やアメリンド人種と呼ばれてきた。

【アメリカ先住民】

彼は次を認識する、信仰する。

- (1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、アメリカ先住民はモンゴロイド人種である、またはモンゴロイド人種の近縁種である。

異なる表現では、その主体はアメリカ先住民をモンゴロイド人種、またはモンゴロイド人種の近縁種であると認識する。実際、アメリカ先住民には、完全なモンゴロイド人種から中央アジア人のようなコーカサス人種の遺伝子を持ったサピエンスまで存在するように見える。または、ケッ

ト人を乾燥適応させて、顔を濃くさせたように見える。ただ、彼らは白人でないのは事実である。色はポリネシア人や東南アジア人の一部のように赤色である。また、アメリカ先住民の一部は東南アジア人やポリネシア人やマオリ人やハワイ自然民、台湾自然民や縄文人に見える。

【アメリカ先住民の父系と母系】

彼は次を認識する、信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、アメリカ先住民の父系と母系はモンゴロイド人種系統、または東ユーラシア系統である。

例えば、アメリカ先住民の父系はY染色体ハプログループQとC2系統である。前者はケット人やフン族に観察される。後者はモンゴル人に観察される。特に、後者はモンゴロイド人種系統の父系であるように思える。また、mtDNAに関して、A系統とB系統とC系統、そしてD系統は東アジア東部由来であるように思える。Q系統の発祥には、議論が残っている。mtDNA Xはコーカサス人種系統であるように思える。

【ジェロニモ】

彼は次を認識する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、ジェロニモは典型的なモンゴロイド人種でない。

異なる表現では、その主体はジェロニモを典型的なモンゴロイド人種と認識しない。ジェロニモはシベリアにおけるケット人の顔を乾燥適応させて、濃くしたように見える。少なくとも、彼は東洋人（東洋小人種）には見えない。彼の顔はゴツイ東南アジア人や琉球人やアイヌ人を含む縄文人に見える。また、フィリピンのドゥテルテ元大統領もこの種の系統の顔を持っているように思える。

【タタンカ・イヨタケ（シッティング・ブル）】

彼は次を認識する、または信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、タタンカ・イヨタケは典型的なモンゴロイド人種でない。

異なる表現では、その主体はタタンカ・イヨタケを典型的なモンゴロイド人種と認識しない。タタンカ・イヨタケはケット人の顔を乾燥適応させて、肌を日光で赤色に焼き、さらにゴツくしたように見える。シベリアのシャーマンに似ている。また、核ゲノムに関して、コーカサス人種の遺伝子を持っていても、不思議でないように思える。中央アジア人にも存在するように思える。

【ジョセフ酋長】

彼は次を認識する、または信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、ジョセフ酋長は典型的なモンゴロイド人種でない。

異なる表現では、その主体はジョセフ酋長を典型的なモンゴロイド人種と認識しない。ただし、ジョセフ酋長はタタンカやジェロニモよりもモンゴロイド人種的に見える。ジョセフ酋長の見た目はタタンカやジェロニモの項と同じである。

【チャールズ・イーストマン】

彼は次を認識する、または信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、チャールズ・イーストマンはモンゴロイド人種であるように見える。

チャールズ・イーストマンは、上記のジェロニモやタタンカ、ジョセフの中では最もモンゴロイド人種的であるように見える。

【セラフィン・オーウェン】

彼は次を認識する、または信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、セラフィン・オーウェンはモンゴロイド人種である。

ナバホ族のセラフィン・オーウェンは東京新聞の杉藤貴浩の記事（2022年11月24日、ニューヨークから）で登場している（www.tokyo-np.co.jp/article/215696）。彼女の顔は完全なモンゴロイド人種であり、東南アジア人や南方の大陸東洋人のようである。彼女の肌は少し赤いが、大和民族にもいそうな顔である。

【イヌイット】

彼は次を認識する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、イヌイット人はモンゴロイド人種である。

(2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、イヌイット人は東洋小人種である。

異なる表現では、その主体はイヌイット人をモンゴロイド人種と認識する。

【ヤノマミ族】

彼は次を認識する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、ヤノマミ人はモンゴロイド人種である。

(2) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、ヤノマミ人はアメリカ小人種である。

ウィキペディアの写真を見ると、彼はヤノマミ人をモンゴロイド人種と認識する。日本語版における写真では、彼はヤノマミ人の顔の形を東洋人的であると認識する。彼らの目は細く、東南アジア人的ですらない。ただし、彼らの肌は赤い。

【ハワイ先住民】

彼は次を認識する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、ハワイ先住民はモンゴロイド人種である。

正確には、ハワイ先住民はポリネシア人に似ている。

【アメリカ先住民の人種の確定】

彼は次を認識する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が信仰するのは、アメリカ先住民の人種は地中海人と欧州人との接触によって決定される。

つまり、アメリカ先住民の人種は大航海時代の後の白人との接触によって決定される。例えば、たとえ北ユーラシア人が完全なコーカサス人種であって、かつ彼らがアメリカ大陸に移動したとしても、もし彼らが後発のモンゴロイド人種と交雑して、かつ白人とその状態で接触したならば、アメリカ先住民の人種はその北ユーラシア系統でなく、モンゴロイド人種と交雑した人種である。なお、現実的には、北ユーラシア人自体がモンゴロイド人種の遺伝子を持っていた可能性がある。

【白人による認識】

彼は次を信仰する。

(1) もしある主体が儒教徒であるならば、その主体が認識するのは、西欧白人はアメリカ先住民を同じコーカサス人種と認識していたようには見えない。

だからこそ、西欧白人はアメリカ先住民をあのように虐殺、絶滅に追いやった。イラン人やアラブ人やトルコ人は絶滅されていない一方、アメリカ先住民やアボリジニは絶滅に追いやられた。なぜなら、彼らは同じコーカサス人種と認識していなかった可能性がある。また、西欧白人は人種を肌の色で分類して認識していた。その観点からも、彼らはアメリカ先住民に人種的な親近感を覚えていなかったのは事実であるように思える。彼は白人のこの認識を一種の契約と認識する。現時点でも、西欧白人はアメリカ先住民を同じコーカサス人種として認識していないように見える。例えば、カナダでは、アメリカ先住民の暗殺及び隠蔽が現在でも継続している。西欧白人のアメリカ国民はアメリカ先住民を統治者にしようとしていない。かつ彼らはその統治者を人種的に嫌がる可能性があるように思える。もし西欧白人がアメリカ先住民を同じコーカサス人種と認識していたならば、彼らはアメリカ先住民に対してこのような態度を取らないだろう。